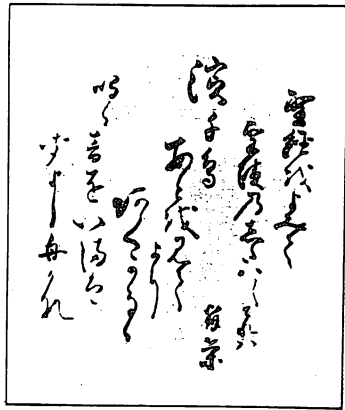


號參第 卷貳第



佛陀禪那辨榮上人  
追恩號

寫眞目次

辨榮上人御遺墨	京都光明會	(一)
辨榮上人尊像	辨榮上人御遺稿	(二)
如來尊像	辨榮上人	(三)
追悼歌(弁井一郎作歌、中井平三郎作也)	辨榮上人御遺稿	(四)
念佛三昧の神の風	辨榮上人御遺稿	(五)
佛陀禪那辨榮上人於柏崎極樂寺御往生の事	辨榮上人御遺稿	(六)
如來光裡の上人	辨榮上人御遺稿	(七)
唱大德辨榮上人	辨榮上人御遺稿	(八)
聖辨榮上人を追懐しまつりて	辨榮上人御遺稿	(九)
最後の御説法	辨榮上人御遺稿	(十)
宗祖の皮纏と私	辨榮上人御遺稿	(十一)
御遺文に涙して	辨榮上人御遺稿	(十二)
噫々吾等が師父なる辨榮上人	辨榮上人御遺稿	(十三)
大人格辨榮聖者と私	辨榮上人御遺稿	(十四)
上人の追想	辨榮上人御遺稿	(十五)
涙の雫	辨榮上人御遺稿	(十六)
御遺後の實感	辨榮上人御遺稿	(十七)
隨行當時思出の一節	辨榮上人御遺稿	(十八)
アア御上人アア御上人	辨榮上人御遺稿	(十九)
山崎辨榮上人を悼み奉る	辨榮上人御遺稿	(二十)
信仰の思辨辨榮上人の御遺化と就る感想	辨榮上人御遺稿	(二十一)
辨榮上人御遺化の前後に就て	辨榮上人御遺稿	(二十二)
嗚呼我が慈父山崎辨榮上人	辨榮上人御遺稿	(二十三)
御病中より御遺骨奉迎まで	辨榮上人御遺稿	(二十四)
上人の御徳を敬慕する私の心	辨榮上人御遺稿	(二十五)
辨榮上人と光明學園に就て	辨榮上人御遺稿	(二十六)

表紙

辨榮上人	紙	(一)
辨榮上人	紙	(二)
御上人の遺文を拜するにつけて	追恩	(三)
無想	追恩	(四)
辨榮上人と三好愛吉閣下	追恩	(五)
生を體得せる我等が聖者	追恩	(六)
常在靈鷲山	追恩	(七)
追慕の念禁ずる能はず	追恩	(八)
地方短信	追恩	(九)
追慕と追慕	追恩	(十)
追慕と追慕	追恩	(十一)
追慕と追慕	追恩	(十二)
追慕と追慕	追恩	(十三)
追慕と追慕	追恩	(十四)
追慕と追慕	追恩	(十五)
追慕と追慕	追恩	(十六)
追慕と追慕	追恩	(十七)
追慕と追慕	追恩	(十八)
追慕と追慕	追恩	(十九)
追慕と追慕	追恩	(二十)
追慕と追慕	追恩	(二十一)
追慕と追慕	追恩	(二十二)
追慕と追慕	追恩	(二十三)
追慕と追慕	追恩	(二十四)
追慕と追慕	追恩	(二十五)
追慕と追慕	追恩	(二十六)
追慕と追慕	追恩	(二十七)
追慕と追慕	追恩	(二十八)
追慕と追慕	追恩	(二十九)
追慕と追慕	追恩	(三十)
追慕と追慕	追恩	(三十一)
追慕と追慕	追恩	(三十二)
追慕と追慕	追恩	(三十三)
追慕と追慕	追恩	(三十四)
追慕と追慕	追恩	(三十五)
追慕と追慕	追恩	(三十六)
追慕と追慕	追恩	(三十七)
追慕と追慕	追恩	(三十八)
追慕と追慕	追恩	(三十九)
追慕と追慕	追恩	(四十)
追慕と追慕	追恩	(四十一)
追慕と追慕	追恩	(四十二)
追慕と追慕	追恩	(四十三)
追慕と追慕	追恩	(四十四)
追慕と追慕	追恩	(四十五)
追慕と追慕	追恩	(四十六)
追慕と追慕	追恩	(四十七)
追慕と追慕	追恩	(四十八)
追慕と追慕	追恩	(四十九)
追慕と追慕	追恩	(五十)



南無阿彌陀佛



辨榮上人遺悼曲

Musical score for '辨榮上人遺悼曲' with lyrics in Japanese. The score includes a key signature of one flat and a 4/4 time signature. The lyrics are: 哀悼曲 大正九年十二月四日 午前六時五分 辨榮上人遺悼曲. The lyrics describe the passing of the上人 and the grief of the community.

哀悼曲

大正九年十二月四日 午前六時五分 辨榮上人遺悼曲

哀悼曲 大正九年十二月四日 午前六時五分 辨榮上人遺悼曲. The lyrics are: 哀悼曲 大正九年十二月四日 午前六時五分 辨榮上人遺悼曲. The lyrics describe the passing of the上人 and the grief of the community.

念佛三昧の神の風

辨榮上人御遺稿

世の同胞よ、念佛三昧の行は三世の諸佛も念く斯妙行に依て正覺を成しなされたほどの最とも尊き行法であります。此尊き妙行を修する時の神の居所を能く心得て御勤めなさるやうに御勤め申します。何事でも其妙所に達せんとするには先づ神の上方が肝心であります。眞に神の投込ざる念佛では心霊に活くることが出来ませぬ。然らば何にせば念佛に神を入れる事が出来るであらうと御問なさるのでせう。今愚

空しく在りながら神は彌陀の中に逍遙するやうになるのであります。夫でも又思ひなされるのでせう。生れて以來一度も暇んだ事の無い如來をどうして想はれませうと。けれど確と見えぬが如く、如來は實に在りますものであるから只佛の教を信じて現に在りますことを信じて念佛し玉へ。一心に念する真正面に在ります如來はあなたを念する心を一々に受なされて在ります事がある。心に響いて来る程に。然しながら口に阿彌陀佛と云ながら心は自己の胸中に在りて種々の雑念や様々の妄想に馳られて神の中に紛らされてしまふて、口ばかりは御名であるが神は如來と一つに爲ておらぬと。夫では眞の念佛三昧でありませぬ。念佛三昧の正に如來の光、明の中に風の任々風の如くに飛び騰るべきであります。

一心の空しく在りながら神は彌陀の中に逍遙するやうになるのであります。夫でも又思ひなされるのでせう。生れて以來一度も暇んだ事の無い如來をどうして想はれませうと。けれど確と見えぬが如く、如來は實に在りますものであるから只佛の教を信じて現に在りますことを信じて念佛し玉へ。一心に念する真正面に在ります如來はあなたを念する心を一々に受なされて在ります事がある。心に響いて来る程に。然しながら口に阿彌陀佛と云ながら心は自己の胸中に在りて種々の雑念や様々の妄想に馳られて神の中に紛らされてしまふて、口ばかりは御名であるが神は如來と一つに爲ておらぬと。夫では眞の念佛三昧でありませぬ。念佛三昧の正に如來の光、明の中に風の任々風の如くに飛び騰るべきであります。

# 佛陀禪那辨榮上人於柏崎

## 極樂寺御往生の事 (承前)

十二月二十四日——到々心配の中にその夜も明けました。引續き御容體は悪く一同の用は頼むばかり、御熱は相變らず三十九度を往復して居ります。チブヌの方の試験は不完全ながら多分そうではなからう(まだ安心は出来な)この事でありました。

此の日の夕方でありました。上人様の御病勢が餘り思はしくない事を聞知せられた京都の信者の恒村醫師が御見舞に見えました。一同折も折とて大いに元氣を得、非常に心強く感じました。夜肺炎の手當に瀑布を致しました。そして又心臓が非常に御弱りでありましたので注射を致しました所非常に有効で御苦しみが取れて楽になつたと仰られました。御熱も一時は三十八度迄も下り一同喜びの聲を挙げました。(恒村先生はその日から御病床につき切りて御臨終まで御看護の任に當られました)

二十五日——御熱は相變らず高くありましたが今朝は餘程楽になつたと仰せられて御氣分が少しはお宜しい様でありました。然し胃腸が非常に御弱りで胃の粘膜が過敏になり殆ど食物が納まらず、朝食乳を差し上げました所がすつかりそれをお戻しになりました。その後は冷水の外殆ど何も召し上げませんでした。御熱の爲めに胃が非常に乾いて居つても牛乳も同じ味だと仰いました。

是の中は段々御樂の様に見受けて居りましたのに夜になるに従つて退々と御氣色が悪くなり、御熱は又三十九度にも引り、御息つかひも悪く、一同の心配もやうやく強くなつて参りました。すると夜の十一時頃上人様は看護をして居られました原吉即さんに百萬遊を換つて欲しいと仰いました。それで一同一時間ばかり一心に百萬遊を繰り返すともうよいと仰つて、それから少し御樂の様になりました。その時には御氣色が悪かつた爲に一時は危篤の電報を打つべく頼信紙に迄認めたのでありますがその後の御経過が非常に御宜しかつたので見せる事に致しました。

二十六日——此の日は朝から餘程御氣分がよろしく食欲が少しく出て来たやうな氣がすると仰せられて自ら進んでオモエを少し召上りました。一同の喜び御氣も終に峠を越したのであらうとホット一息つきました。查食には牛乳も少し召上り、午後になつても御熱は三十八度の上には昇らず、此の分でもよくなつて戴けば一同闇夜に光明を認めた喜びを感じました。

然し、なか／＼此方の願ふやうには行かないもので、その日は一同欠し振りて落着いた氣持ちで居りましたのに突然十一時頃になつて恒村先生が御病室からたゞの氣色で出て来られて、丁度來合せて居られました。佛蘭西先生に耳打ちをして一所に病室へ入つて行かれました。一同只事ならず思つて居りますと、今度は極樂寺の奥さんが眞背な顔をして胸を押へて思も切れそになつて茶の間へめり込んで来られました。聲を立てまいと油揚げを頬へて泣いてかられるのを一同でやうやくなだめて様子を聞きますと「血が!血が!」と言はれます。胸出血!一同茫然と致しました。

一難去つて一難來る。昨夜が危期の終りであらうと思つたのに今また此の變事を見るとは。前門の虎を逸れて後門の狼に襲はれたとは此の事でありました。一時は殆ど絶望と迄落膽を致しましたがその後の御経過が案外およろしく、上人様は却つて氣分がよくなつたと仰います。(此の時上人様は「今迄どうも腹の具合が悪くて困るから観音様の灌頂の水で洗濯をして貰いたらさぞ氣持が好からうと思つてみたが丁度その通りになつ

た」と願ひげに仰せられました。醫師に伺ひましても心臓の具合が餘程以前とはよくなつたとの話、引續いて出血さへなければ却て結果は好からうと言ふので不安の中にも兎も角や、安心をしてその夜を明しました。そして不思議にも御息は今迄よりは餘程安らからず少しは御安眠が御出來の様に御見舞を致しました。一喜一憂、猫の眼のやうに變る上人様の御容體の一高一低がそのまゝ、私共の喜と悲の原因でありました。

二十七日——昨夜の變に似ず今朝は大變に御容體がお好しく御熱も下り呼吸も平安で本當に少し御樂の御様子であります。昨日は皆が御熱が三十八度だと云つて御喜びを申し上げて居つた時など人知れず「平常さ般べれば」など仰つてきたなか／＼御痛そうでありましたが今日はもう御自分でも「樂になつて有難い」などと仰せになり、時に障子を開けさせて裏の山の秋色を御覽になつたりして喜んでおいでになりました。その日は胸出血の後でもありますから一日絶食を御願致しました爲に食慾が出て来たとも御自分でも氣持好げに仰つておられました。

此の日の午後當りから上人様は常に喜ばし氣な笑顔を洩らされ御口にせられる事は只有難い如來様の御慈悲ばかり、或時は「佛智不思議、佛智不思議」と感に耐えたやうに仰られ、又或時は「如來様の御慈悲は宇宙に遍滿して」と仰つて自分の心はスツカリ如來様の中へ溶け込んでしまつて話をしやうにも言葉にならないと言ふ意味の事を仰せられました。そして手眞似で御慈悲の中に溶け込んだ態を示され、又手拍子を御打ちになつて何か口中で御歌ひになり歡喜踴躍の状態を御示しになりました。

夜に入ると引續き御興奮の状態が始終何かお歌ひになり、再びし氣に節廻しと面白く時時をなさつたりしてゐられたのが夜中の十二時頃になつて急に「今が斷末魔である」と仰せられました。そして暫くすると又突然虚空に向つて幾度か禱拜せられ「あゝ終に復活した。斷末魔の苦しみがこんなに樂なると有難い。實に有難い。復活した。復活した。有難い」と感涙に満ちた御聲で仰せられました。(極樂寺夫人恒村夫人御看護中の出来事)

其の後も御興奮の状態が心の底から込み上げて来る嬉しさをそのままに御事を御歌ひになつてゐられるやうな御様子でありましたが、よく承りますと幾度となく「本體眞如の都より」と言ふ言葉を御擧げ返しになつてゐられました。それから時々「ア、ア」と仰くやうに仰せられるので看護婦が「御苦しいごさいませう」と仰ひますと「いえ、有難いのです」と仰います。そしてなるべく觸らないでそのまゝソツとして置いて呉れと仰つて御自分で愉快な色々の事をして(例は両手を延して大きく開くなど、樂しんでおいでになりました。時には又御手で虚空を御指しになり又御自分の額や口を御指しになり、相好圓滿言ひ難き如來が今現に御目の前に在します事を御示しになりました。

明方の四時近く迄そんな風に興奮しておいでになりましたがそれから少し溫和しく安らかにお眠りになりました。二十八日——此の日は上人様御病氣中を通じて最も御高福な日であられたやうに拜せられました。一日乾した胃の要求は可なり強くオモエを野菜スープと牛乳を少しづつ召上りました。そして相變らず例の嬉し氣な笑顔をせられまして神は宗教哲學の夢想の中に入つてゐる旨を御洩しになりました。午前十時頃の事、合掌して幾度も虚空を禮拜せられ、無礙光如來が御出ましになつたと仰せられました。そして常に有難い有難いと仰つては人を見るに色々の御說法をお聞せになりました。「年度の病氣は丁度一年助奈様から御說法を聞いたと同様である。まことに有難い事である。自分は此の病氣で苦しい思をした御陰で平常の何でもない時間がどれ程大切なものであるかを知らして貰いた。それならこ

んな苦しみをせず知らして隠ければ尚結構であると思ふかも知れぬがそうでない。熱度が三十八度よりは九度九度よりは九度五分ごとの苦しみが強ければ強い程平常の何の苦しきも無い時間の有難さが痛感される。何と此の苦しき一時間を平常の一時間にして戴きたいと思ふにつけて、平常健康の時には「今日は身がガムライ」とか「今日は気が進まない」とか言つてツツ／＼と過して居つたが、誠に勿體なく思れる。

上人様の御平常は人も知る通りであります。その上人様にして此の言あり、承はる、私共こそ憐れに徹するを覚えました。それから又

「今迄も自分は一切は悲哀も苦痛も皆如来の恩寵である事を自らも信じ人に教へてゐたが今それを如實に経験した」又一病氣は病氣として幾ら苦しきとも如来の慈悲は如何なる場合に満ち／＼してゐる」と。仰せられ或時は又靜に

「薪のある間は火は盡きぬ。自分の病氣も焼けるものゝある間は仕方がない」と仰られました(私は此の御言葉と思ひ出す毎に、御臨終の偈文の結句「果満豊王彌丁々」の文を思ひ浮べずにはゐられませぬ)。

夕方近くなつてスツカリ御氣分が晴れて「もうこれで病氣の苦しきも御別れである。何だか名残り惜しいやうな氣もする」と仰いました。此の御言葉が何れ程の深い意味を持つてゐるのか知るよしもない凡夫の悲しさは只暫くのみ居りました。昨日あたりから上人様は時に幼児のやうな無邪氣な言を仰せになる事がありました。

その夜少し一昨日の残りとも思はれる血便が二回出ましたが別に御氣分にも變りなく精進しやすやかな御顔付でありました。

二十九日—此の日も引續き御樂で新しい人を見るにはよく御話をせられ、東京の小黒氏には平等性の海に融合してゐる」と告げられました。然るに此の午後から又々御氣が少ししりはじめました。大した事もあるまいと思はしたが、折角晴れかけた一同の顔は又もとの不安に戻りかけました。此の日當りから御熱で御舌が乾く爲御言葉がつれて、餘り注意をして承らないと解らないやうになりました。その爲か上人様御自身も餘程無口になりました。

御熱は又三十九度にも昇りました。

三十日—御熱は引續き高く、心臓が大變御悪いとの事で御息つかひも御苦しうであります。半月に亘んとする引續きの高熱に御身の疲勞も御程の御熱のあたり非常に御病になつて居られましたので御見舞に見えた方などは一目見てハラ／＼と涙流される有様でありました。三日來の喜も今は悲しい思川となりました。

此の夜新海市の醫學専門学校長澤田博士を招聘して診察を仰ぎました。その結果は主治の三腎と同様で心臓と胃腸と殊に腎臓が非常に御悪い故—それに御老體の事でもありし……と大體は難しいやうな御話しでありました。一同今更ながら非常に落膽を致しましたが如何とも策の施しやうなく手を拱て見てゐるばかりであります。治療の方法は信仰厚き三人の醫師が(二人は傍に付きりて)有ゆる手段を構して下さる事故之以上は如何とも致し方なく、此の上は人力の及ばざる所只如来様に御任せ申上げる外はありません。その夜も不安の中に明けました。

此の日から御口の傍に少し瘰癧が起りはじめました(二)に不思議な事には上人様の御部屋へ伺ふど何時も不安の念が安らぐ何となく力強い威を興へられる事でありました。

十二月一日—月日は新つても上人様の御病氣は新らさうら悲しい氣分は一同を壓して居りました。早朝澤田博士が再び御診察を致されました。その御報告に依ると昨夜よりは餘程御好しいとの事、此の分ならば或は保

つやも知れず、悪いにしてもそれ程きな事もあるまいと言ふ様に、承りました。それで私共再び懸つたやうになり、寂しい安心を抱いて兎も角も落着いて居りました。然し食慾は引續いておありになり、牛乳にミツワマルツ錠などを召上つてゐられました。

その夜上人様は御傍に看護してゐられる御弟子の奥村辨師に仰せられました。

「如来には人智の測知する事の出来ない大威力がある。その威力に御廻りすればどんな事でも出来ない事は無い。お前もよくその力に御廻りして主義の宣傳に勤めよ」

かうした有難い御言葉を御聞せ下さらうとの御思召らしく幾度か何事かを仰られますけれども、もうその時分には餘程よく氣を落着けて御伺ひしても御舌が凝れて何の事かよく解らない事が幾々でありました。それに上人様は幾度でも御話し下さいますか廻り難い舌を無理にお使ひ下さる御様子を見ては打して御伺ひするの

も餘りに心苦しうよく解つたやうな顔をして居りました。今にして思へば上人様に對し又皆様に對し誠に申すに次第であります。當時の私には以上何とも致し方がございせんでした。此處に深く御託を申上ります。

二、三、四日は先月御説教

振りさけ見れば僅か半日の御病氣—けれどもそれは幾箇人の全生涯にも替へ難い半月でありました。その間の上人様の二難手—一投足—それが皆私共への甚深の御説法でありました。破されし御言葉の数々、思へばみんな御別の御言葉でありました。平常は降り御洩しにならなかつた不可思議の内威をそのまゝに御聞き下さつた事も思へば皆疑し行く子等への最後の贈りでありました。

あ、凭てて我が師は逝きました。恩師も慈父も否我等が生命そのものともたのむ我が師は逝きました。御名呼女子等が叫びを後に心強くも我が父は逝きました。任せはてたる御心には唯一言の愁ひの聲さへもなく……。さればとて此の悲しみの聲が聞えぬではあるまいのに、永夜の眠より漸く覺めし子等が心の底よりの求めの聲の耳に入らぬではなからうのに、此の惶しい御西化は何事であらうけれども聖旨ならば是非もなし。必ずや深い御思召のある事でありませう。

あれもこれも皆只悲しい思川のみになりました。突進として杖とも柱ともたのむ上人様の御遷化に遇つて、たゞもう茫然といたしました。こんな事なら又しても愚痴のみが先に立ちます。けれども何時迄かくてあるべきでせう。在せし日の御恵深き御教化の跡を偲び、殊に最後の半月間重き御病中の三葉雨かなる御垂訓を思ひ出せば唯身を以て報い奉らん事を期せんのみであります。然も別れと云ふも只一時、常磐の御國での再會—御々冥々として唯迷と業とをのみ重ぬるべき此の身が一度過つて復永劫に別るゝ事なき常磐の御國での再會を約せられたのですもの。

誠に恩師廣大の慈悲を思へば粉骨何ぞ辭せん。凡眼金蓮上の慈悲を見奉るに由なけれども、常に我等と共に在ます事を信じて聖意に契い奉らんことを期す。仰ぎ願はくは西方の師父よ、唯夫照鑑を垂れたまへ、加被を垂れ給へ、合掌至禮。南無阿彌陀佛。

これは私谷安三の見聞するを得ました範圍での上人御生記であります。偉大なる上人様の大行が語る幾分を此の凡筆が傳へ得た事でありませ。聖者がその最後の半月間に示された大教訓の幾分を此の凡眼が捉へ得た事でありませう。思へば恐ろしい。聖徳を置く事なきや怖れにあらはれませぬ。我が得し所、我傳へし所は其の真分にしてその知らざる所は尚し大海の水の如くである。この諸語に斷中上げて置ます。不足を補ふ下さる方一人でも多し。ご希望して此の次第であります。

最後に、此の記事は唯上人様のみ寫すべく書かれましたので周囲の幾多信者法類等の獻身の美談は一切之を割愛致しました。讀者乞下されんことを。

# 追 想

中島 觀 秀 僧 正

嗚呼、辨榮上人は遊けり、越後相崎、極樂寺の教化を最後として遊けり、極樂に還るの人、亦極樂の名を撰ぶか、蓋し亦偶然にあらざるべし、上人恩老より少きこと七八歳、若し年長順を以て遊かば、恩老先づ逝くべきに、先づ玉を撰んで瓦礫を後に遺すの謂か、將た業報の輕重、遂に此陶法を爲すものか、是れ決して然らず、上人平生の勤勉、殆ど晝夜を止めず、手に念珠といふよりは、筆を執て佛像を講くを常とす、彼の徳本上人は「手に稱へ、心に思ひ忘れずは、口にはたとひ、餘を語るとも」の給ひたることあり、辨榮上人の執筆、亦手に稱ふるものか、加之、求道者に対する對話の如き、詞々として徹夜も尙止まざるの概あり、故に上人在世の時長は、背て長壽といふにあらざるも、その教化の能率に至りては、幾百歳の功を奏したりといふべし、宜なるかな諸人渴仰し、その遺化の時々に當りては、實に千里を遠しとせずして、その罪に會するものあり、その徳化の深密に至りては、直接實感の人、必ず之を述ぶるあらん、今は只上人に對する恩老の實感のみ上人は定めて還來極樂の人なるを信す、故に病中を類ふ詞に「各留半座上華臺、待我閻浮同行人」といふ導師の言を以て爲したり、且つ上人遺化を聞ては「彌陀たのむ、心のまこと、かはらねば、おなしはちすの、座を分けてまで」されど上人の唱ふる信仰の對象に就ては、餘に時世に迎合するの嫌ひあるやに思ひ、傳承の考案を練り、大に糾さんと思ひたりき、此の事を御生前に果さざりしは、聊か遺憾に思ひたれども、恩老も遠からず、淨土に參るべき身なれば、頓て彌陀慈父の御前に言上せば、興味ある邂逅ならんと、樂み居れども、臨終來迎の時までは、娑婆道中の危險、取り残されたる身の上は、只一筋に助け給ひ「南無阿彌陀佛」

# 如來光裡の上人

椎尾 辨 匡 博士

山崎上人の歸西は教法、同行、未信より見て一大波瀾にして、假すに十年あらばこの念誦に切なるものがある、而も如來の慈光は生に死に此に彼に變りなく照臨し給へるを感じてこの一篇を記念誌に捧ぐ、上人夙に如來光裡に住み給へば死も死にあらす慈愍顔顏衆生を攝化し給ふこと依然變らない、之を觀るものには別離も別離にあらす慈愍切念佛を物進し給ふこと死後尙同じきを感すべしである、實にミオヤに一心ならずば慈悲も我愛に墮す、我等に相愛の情なきにあらざるも、夫婦の愛と雖も絶対のミオヤに一心なるによりて結ばるゝにあらすば不離なること期せられない、誰か増す花に移らふことなしと云ふことが出来るか、朋友の誼と雖、忠君の誠と雖も、絶対のミオヤに一心なるに非ずして名利に轉せらるゝことなしと斷せらるゝか、何れべきは絶対のミオヤである、我愛の偏執はその非微小なるも遂に大惡となる、暗影は黒闇となり、疎遠は隔絶となる、只仰ぐべきはミオヤの光明、白道の一跡あるのみである、一草一石の上にも如來の光明は輝き、一難一障の間にも大慈の顯現あるも、佛心大慈を見るは唯念佛の勝方便にすべきである、上人が吉水の淨流に汲み、此念佛の中にミオヤの光明を見給へる如く、上人の示滅にも念佛光明の一跡が認められる、三十年前の上人は米粒名號細字圖像に巧なる異僧として見られ有縁を給はれた、二十年前の上人は佛蹟參拜者として熱心なる信解の鼓吹者、法身佛の主張者として認められた、十年前の上人は所行漸く圓熟し圖像結縁の淨資を擧げて文書を編纂發布し各地の有縁を糾合して淨行の結社を成就し、自他等しくミオヤの光裡に住

# 吁 大德辨榮上人

吉 岡 性 空

恩老が辨榮上人を知りしことは約三十年以前であるが親しく其人格に接したのは大正三年の春である、爾來自坊への御巡錫のみでも回数十、日數十回、かくて上人に接すれば接するほど其人格の偉大と知解の深廣とに敬服しつゝ、上人こそは眞に知徳圓滿の大菩薩なり、恐くは如來の靈應ならんとまで渴仰信賴した、特に常恒不斷の御誓願を以て大御親の福音宣傳に當らせ玉ひしことを、衷心から感謝を捧げて居た、一部の人士は上人を目して異安心呼ばりしをしが、こは上人の真髓を知らざる徒である、そも佛敎の生命は古今不變とは云へ、其表現としての教義宣傳法は人知の進むに従ひて種々に形を變へねばならぬ、若し此自覺もなく唯徒らに舊式を固守せんか未法萬年を待たずして佛敎は遂に滅盡するであらう、上人は茲に深く鑑み玉ひ、淨土教義の宣傳には克く現代人の理性に満足を興ふべき極めて新しき形式を用ひ玉ひたのである、ために其教化に浴せんとせし集ひ來るもの羸るが如く、上人は來るを迎ひ去るを送り、一々懇切に大御親の福音を傳へ玉ふこと眞に慈母の手に對する如くであつた、かくて朝野の所向ます、盛んに、念佛の勇者日に増大したではないか、昨年十月自坊御巡錫中、御教化の對告衆は青年學生を初め知識階級の人士が其大半を占めて居た、而して御方からのこめる御講話に感激せざるなく、就中醫學專學生(九名)の如き立ちどころに一週間の念佛修養を願ひ出で、爾後毎土曜の晨朝には自坊に詣で、念佛專修を勵んで居る、之れ全く上人の大人格の靈化に由ると云へ、一は其宣傳形式が現代の爲るがためである、今や世界思潮の激變につれ信仰界ます、混濁を極め、上人徳に期待するもの甚大を加ふるのとき、昨年十二月四日忽ち涅槃の雲に隠れ玉ひしことは、獨り敎家の缺損

なるのみならず、予會國家の大敵扱ではなからうか。

あ、大徳辨榮上人……上人は何故にかくも早く大御親の許に歸へり給ひしか、大御親は何故に今少しく天壽を假さざりしか、吾等は、大御親が上人を引き取り給ひしことの、其儼りの早きことを痛恨するものである。

されど、こは深き聖旨のあることならん、……彼の崇高雄大なる莊嚴裡に大住生の奇蹟を示し給ひ、其貴き御臨終の風光を拜したる吾等は、唯上人の御勳を追ふべく念佛專修の遺教を急ぐの外はなからう、同時に世の凡ての兄弟姉妹と共に、如來の靈光に浴すべく誓起一番せねばならぬ、これが大御親の聖旨に酬ひ、上人の大徳の御思召に叶ふ第一義ではなからうか、終りに臨みて上人より賜はりし御芳墨の一節を左に紹介したい。

醫學の學生諸君が信仰心を發しなされしとの事に對しては、一は如來様の聖意の照らしむる處、且つ貴上人の厚き御保護の在るところ、定に有難く感謝の外なく候、定に惟るに人身受け難く佛法逢ひ難し、若し今生空しく過しなば解脫何れの世にかけせん、中略、願はば一心に念佛して一心の金剛石を琢磨して、彌陀の靈光の映する光輝ある人格者の益々多く出で、我國民の精神の開悟たる裡に憐める人を救はれんことをのみ希望に堪へす候云々。

嗚呼、こはこれ上人大徳が御病、床につかせ給ひし前日(十一月十六日)御認めの貴き玉意である、これが愚老に對する上人最後の御芳墨なりしことを思ふて感慨無量嗚咽湛然……雨無阿彌陀佛……

### 聖辨榮上人を追懐しまつりて

熊野宗純

大正九年十二月四日、聖辨榮上人は倣然彌陀慈父の御國に還り給ふた、回顧すれば、自分が初めて上人の温容に接したのは、大正八年八月廣島市心行寺念佛三昧會の時であつた。

遺兄佐々木爲興師に誘はれ、客殿に初めて上人を相見した自分は、上人の犯し難き崇高の人格と仁情溢るゝ温容に接して、慈父の臘腸味と慈母の愛情味を感せずには居られなかつた、この時、自分は不思議にも一種の云ひ知れぬ充實味を心の奥底に覺へた。

總べての議論を超越して、ひたすらに如來の恩寵をしみじみと感するやうになつたのも、この時からである從來の生活態度に一轉機を得たのも(假令今尚ほ久遠の罪業の慣性に出で身心をみだされつゝありと雖)この時からである、自分は全く上人に依て身も心も救はれたことを忘るゝことは出来ぬ、げに上人は世にも尊き我が大師世尊にましましたのである。

上人の温容に接せし以來今日に至る、月日を閲すること二年有半、この間講席に侍ること僅かに五回、思へば短き宿縁であつた、されど此間上人より受けた深い深い印象は、永劫に自分の臘裡に刻みつけられて、自分の心から離れる時はない。

十二月三日遺兄佐々木爲興師より上人危篤の悲電に接した、幾度か電文をくりかへし私が視覺を疑ふた、上人は人生救済の大使命を帯びて、如來の恩寵を知らしめんがために世に遣れたる大偉人である、未だ使命を果し給ふこと半ならずしてこの世を去り給ふこととは、當時の自分の堅い信心で、當時の自分の堅い信心であつた。

かくてあるべきにもあらねば、行李物々停車場にかけつけ身を列車に投じ、鐵路疾走すること六百哩、三十七時間、柏崎驛に着した、驛頭佐々木大谷兩師より上人は昨朝遂に遷化し給ふたと聞いた時は又自分の耳を疑つた、しかし哀れ自分の視覚も聽覺も間違て居なかつた、何故に上人は此世を去り給ひしか、上人終焉の精舎極樂寺書院の靈室に詣で、上人の聖靈の前に跪きしときの遺せぬ感懐、無量の哀傷今寫

し出すべく、自分にはそんな靈妙の筆がない。

唯聖辨榮上人は逝き給ふた、我が大師世尊は入寂し給ふた、唯濁惡暗黒世界の光明たり燈炬たりし佛陀囉那慈父の御國に還り給ふた(上人滅後三七日の夜上人を追慕しつゝ)

### 最後の御說法

柏明會員 原吉郎

大正九年十二月一日、御上人様の御病苦も少しく薄らぎやすと御睡り遊ばされたる御容子を拜して私には不得已所用の爲め一寸踏宅致しました處俄かに疲勞を感じまして午前六時迄前後不覺に熟睡致しました、今や眠り將に醒めんとせる一刹那、半醒半睡の間に全身眞綿にて包まれし如く暖かに、精神殊の外爽快なるを覺ひ、眼を開きて四方を眺むれば、紺碧の天空際隈なく無限に展開し、皎々たる二ヶの大なる、明星左右に分れて遙かに輝けるを見るの外更に一物の認むべきなし、忽ちにして正面の中央に五彩の雲(方丈十位)初更其中央に等身大の尊影を拜しました、眞に尊く有難く無量の感に満たされまして暫く拜跪合掌して唱名致して居りますと、何處にもなく美妙の首樂が聴えます、除々に顔を擧げて親しく尊顔を拜しますと、其は御上人様であらせられます、御姿や御服装は平生の如くで只一層端嚴清淨であらせられ、眼光徹照して經三四尺位の遊樂に御立ちあらせられます、微笑を含み慈眼を垂れて私を御覽になつて居ります、周圍には十餘りの菩薩方が端正微妙の僧侶男女の御姿をして和れも小なる日光を輝し、金蓮華の上に立つて居られます、而して皆自分の御知合ひの方々の様に想はれました、降り御懐しさに自分も御側へ寄り度と思ひました

が、どうしても近づくことが出来ません、靈室は次第に昇天致します。と歩みて茲に全く覺醒致しました、醒めての後身は猶ほ此の光景中に在るが如き心地致し暫時喜もなく悲もなく思ふことも考ふる事もなき状態にありし間に、何んとなし御上人様は如來の聖意に依りて最早此の世界の御化導を止めさせられ、更らに上天の別世界に於て是れより御傳道遊ばさるゝのであるとの感に致しました。

嗚呼御上人様は近く我々を此世界に留めて御涅槃遊ばさるゝのではなからうか、未だ十年や十五年は何時でも慈願を拜して親しく御教化に預からるゝと思ひ居りしに嗚呼、斯んな事なら平生もつと熱心にもつと眞面目に修行する處であつた。想へば貴き平生の御教へ嗚呼實に難有い辱けなき次第、夫れに就ても自分の信仰の未熟なるは誠に何んとも申譯なひ次第である。今御上人様に離されては實に困る。併しまだ絶望したものではない、御平輪を祈る諸様の献身的至誠は佛天も是れを憐み給ひて假令永が延がらるゝことありとも今一度びは御回復遊ばさるゝかも知れぬ。と種々に思ひまして早速御看誰に極樂寺へ罷り出でました。

同夜十一時頃遺兄夫人、拙者及家内等と共に御看誰申上げて居りますと、御病苦の中よりポツ／＼有難き御語があり、皆なの手を交る々々握つて「何時迄も離れぬ、死んでも離れはせぬ」と仰せられ、皆は萬感胸に迫り不費涙を流しました。最後に

「如來は一切を生育し給ふ其中に安らかに休ませて頂たく我は誠に幸福である。前の林でも向ひの山でも美はしき天でも海の音でも家の松風でも谷の響でも皆悉く如來の爲しめ給ひ如來の赫々たる大光明に照されて在るのであるから其申へ身も心も全く投げ入れて至心に御念佛を申せば自然に如來の聖意と吾が心が融合一致する。是れを善道大師は無爲三昧樂と仰せられた」と御聞かせになりました。

此の御書々々も言ひない尊く難く又た御懐しき心地致し、是れが最後の御説法とならなければ宜いがと千両無量の感が致しました。嗚々遂に。南無阿彌陀佛

## 宗祖之皮髓と私

岩井智海

私は去大正五年七月朝時詰にて知恩院にありし時一周間上人の法話を拜聴しましたことふだけのことで極めて薄縁なものであります。それと雖もその節節録筆記出版の機会、衆の中に起るや私はその意志を代表して出版費表のことに上人におすゝめして快諾を得、且つ本山當路の方にも應援贊助を乞ひ遂には宗祖の皮髓出版せられることになつたわけであり、今から思へば上人御在世中發表相成りし著書の中でも重要なものにして薄縁なことには尤も不思議な御縁でありました。

私は上人の高潔せられたる「法身を理佛智佛と見る哲學的見方を排して法身阿彌陀如來を立て即ち法身を具體的の大人格者となして大造物主としケール博士の神は絶対的人格なりといふも畢竟同じこと」とたひ異教徒の造作主義その根本には立て方の相違は認むるも一と見るといへる問題に向つては未だ私は徹底すること能はず。私は此問題を大切な問題として近頃研究を進めつゝ深く上人の御指導と慈母を仰がんと期待しつゝありし折、俄かとして御遷化の報を聞き愕然として自失し眞に痛惜又痛惜の情に胸よさがる感に堪へません。

上人とは御書の私にしてその御主張に徹底しかねし私にしてかくまで痛惜哀悼の情に堪へません。況してや深厚なる法縁を結び飽まで其の徳化に浴せる諸同人のみ心を察し來れば眞心御同情の念に堪へません。私は上人に對して何にもも語る資格はありませんが此に私の儂りなきかざりなき心中を告白して拜吊の誠意を表します。

## 御遺文に涙して

大阪光明會 鈴木憲榮

恩師上人の御遺書を讀むに際しては比に先年讀いた書讀の一九九部する次第で御座います。此の御書は私に勸修御遺書廿三卷の條に兩名の佛の相好に心をなぐることに就て、宗祖上人の御遺書は、唯理と本願を明けて口に名稱を唱ふるの、この御文に對しての間に御遺書を給はりました。

如來の御影を拜し云々、是につき時代と機類に依りて何を是とし非とは定め難きも信心念佛の前提(安心)に二類あり候、甲は單に未來の幸福を目的とし乙は現在より宗教の向上と永遠の生命を目的とす、甲は如來の人格を便らず唯未來の快樂の爲に口稱念佛せば往生すと勸む。乙は自己の人格向上と人格の如來の光明獲得を目的とする故に人格者の本質に信賴す。人格的の光明を仰ぎて人格靈化の願望を滿さん爲なり。甲は動すれば現代の人に云はしむれば墮落し易き宗教的動機とす。人格向上を意味する宗教には必ず人格の本質を要す。故に釋尊御滅度の折弟子等が白して曰く世尊滅後ごなを師として弟子等が指導を仰がんと世尊曰く吾滅後汝等展轉して行せば如來の法身は汝等常に在り此法身を本尊とせよ師とせよと、我等は人格的本質と常に離れぬを要す。若し如來と離るるときは日々的心行必ず惡道に流轉す。導師の圓光徹照して端正無比なるを常に想へとの御教信すべく候、また佛と離れざる三緣實に念佛者が人格の本質の光明を仰ぐは有がたきことにて候。

勸修御傳は宗祖は一時時代に相應せんが爲に一は萬機普益の爲にて候、若し宗祖今日出玉は現代的人を靈に活すべく宣傳し玉ふこと必せり。

見佛と云ふことは二の意義あり候。一には念佛して如來の慈光を被りて眞に信念が生き來る時は、例へば小兒が生れた計りには親の顔さへ見へぬが乳に哺養せられてからだが発育するに隨つて次第に眼も發達する故に親の顔も見ゆるやうになる。實は小兒の全體が哺養する故に眼も見ゆる如く、見佛と云ふは心靈の全生命が生れ出し其兆候として心眼の見佛と成るのである。換て云はば治した信仰になり如來の光明に依りて靈に治した兆候は佛を見奉らんとする意味にて候。二には佛に迷し如く精神生活の上に常に守本尊として人格的の如來現前し玉ふとの信仰は宗教上の最も宗とする處にて候。各寺の本堂に本尊を安置し奉る所以また各檀家の能増に本尊を安置する所以に候。人々の信仰の頭上に常に如來を安置し活ける佛體を空にせずして自己の本質の指導の下に日々精神生活行為を爲すの最も宗教の宗とする所なりとす。斯の理を以て人格の本尊を立る所以なりとす。

## 噫々吾等が辨榮上人

福岡 中川佛子

靈界の大燈明たる佛陀那辨榮上人は遂に此界化縁の最も未だ盡きざるに、獨り止まざる幾萬の群生を遣して、早くも大いおやの音に隨り玉ふ、終世彼の尊き靈容を拜すること能はず、再び彼の聖き法話を耳にすること能はざるを思へば哀悼、痛惜、感極まりて云ふ可き語もなし矣、噫々！

故上人の靈徳の偉大にましましたること、凡人にあらざる夫れを凡俗の我等が云何なる語を用ひて稱揚すも到底盡すこと能はず。

「法藏菩薩の因位世自在王如來に所詣して佛足を稽首して頌をもて讚仰し玉ひし語に光顯極々として、威神極まりなし、是の如き徳明、興に等しき者なし、日月摩尼の、珠光微細なるも、皆悉く隠蔽して、猶し聚墨の如し、如來の容顏は、世に超へて倫なし、正豊の大音、韻き十方に流る、戒聞精進、三昧智慧、威徳ともがらなく、殊勝希有なり。」

之れ大經の所説なるが、之の頌偈を用ゆるこそよく、上人の威徳の巍々殊妙なるを讚するを得可し。殊に修得し玉ひし學解の光、修證し玉ひし靈格の輝き、觸れたるものを熔解感化せずは止まざるの力、何の比を以て之れを顯さん哉。

嘗て京都の恒村夏山居士未だ今日の熱烈なる信仰の人ならざりし頃、偶々予の紹介せし故著宗祖の皮髓を一讀して得られたる上人に對する感想を予に送られぬ、其一節に「吾が宗門に明星出でましぬ、大聖山崎上人と申し侍る、前生は法然上人にこそおわしき、己が殘しおきたる宗法を更に廣演すべく淨土無二の位を定りて發願に出でましぬ、宗祖の皮髓全篇血滴々を讀むもの靈霧を排して明月を望むが如く一座止め六根明なり云々。」

噫々！大正の聖法然！辨榮上人は果して隠れ玉ひしか。群を亡へる子等は何をたよりに川嗚々(故上人の五七日に)

いままで御身を忘れてとき給ふ恩師の君のありがたきな復活と宜い言葉今も尙胸にのこりてよろこびのわく

上人様を二十三夜様と仰みて

慈悲深き佛の御あどしたひ行けば只有明の月ぞのこれる上人のかたみに残る念佛は四方にかやく彌陀の本願

若山フサ子

### 大人格辨榮聖者と私

羽賀虎三郎

私が上人を初めて拜したのは大正六年五月で尤も其以前大正五年恩患重病にして恢復の望なきより故に法非法師を介し上人より阿彌陀尊影御致し恩息は此の結縁により安樂界に往生致せし喜びと今一つは故上人の宗祖皮髓を拜誦して心中非常に感敬を起し上人愛慕の念燃ゆるが如し一度尊前に拜投すれば慈悲圓滿の温容全身上に體顯して恰も日月を眺むる如く清淨溢れりこの牛身の菩薩こそ吾々の眞の慈父師である而して我等を淨化救済して止まざる處の大御様の御直使であることを切實に感得した爾來毎年春秋二季北越師巡錫の節は必ず茅屋へ御止宿奉仰以て御化益に浴し此時全く俗念去り時間的極樂界に仕した氣分にて觀喜三昧にあり今回も北越師巡錫中大正九年十一月十一日御來岡にあり毎日午後一時より法藏寺に於て御別時式御念佛會を催し夜分は市内各所に出張傳道を乞ひ四五回御由により拙宅御止宿を願へ十六日柏崎町極樂寺へ御供致し此日拜別申上げし處十九日突然電話にて上人様高熱あるに不拘高岡市へ御出、なる、と仰せられ御止め申すと雖御聞入ないから私に御止宿に來柏すべしとの事に付信者若菜醫師同行拜診致し主治醫師岡村雨氏と共に熱心治療に手を盡せども天壽其功も空しく嗚呼悲哉十二月四日曉遂に涅槃界に入らせられたり此の靈的大偉人四十有餘年間宗教生活に全生命を捧げ或る時は筑波山に山籠りして念佛讀經三昧に修業し又或る時は摩訶三昧に浴し中年印度に教祖釋尊聖地を參拜し近年は朝鮮に御巡錫内地に於ては殆ど足跡を遺らざるをなし其渾身の奮闘努力は元祖法然上人近くは徳本行者の御再来とも申し上るべきか全く想像の及ばざる處なり其眞の大菩薩である今この中心佛を失へたるもの全國光明會員は前途の發展繼承の覺悟に付て全く死活的問題なりと信ず來る三月京都都山聖堂に會員集會熱議の結果自ら大勢定まる處ならんも要するに上人の愛子等は私心を去り結合方圓し獻身的に如來の御心を奉じて慈父上人の全生命たる光明主義の大發展貫徹を祈願するものなり。

### 上人の追想

横濱の信者

辨榮上人入寂の悲報に接した時世界の明星が忽焉として消え失せられた様な寂しみを感じた。現代の如き物質主義の世に於て上人の様な偉大な人格を見るのは殆ど荒れ果てた枯れ野原に佇むて燦々たる明星を拜む様なものだ。上人の偉大は其外面的の輪郭や其周囲や背形の暗示によつて眩惑される種類のものではない、其赤裸々の姿の奥底に光つて居る、然しながら凡俗の目には其貴さを見分ける事の出来ない、聖格の偉大である上人の教説だけを聞いても左程我等を魅するに足るものを見なかつた又其成就された世間の事業も決して人を驚か

す程のものなかつた、終世を通じて轉輪と窮乏との戦ひであり其相貌は只人生の風露に晒された素朴の行脚僧であつた然し上人と親みを重ねるものは何時しか其人格に引きつけられて不知不識一種の靈感を得、永ひ間渴仰せる内心の要求を充たされた様に感ぜざるものはなかつた、斯の如き奇しき力は抑々何であつたらうか、人は唯目的に名利や權勢や財貨を漁つて狂狷して居る然し吾等の眞の要求は決して斯の如き假好なものによつて充たされたい、吾等は明瞭に之を自覺して居ない、然しながら何人の心の奥底にも潜むて居る最も切實なる欲求は眞なるもの美なるもの善なるもの求めて止まないものである即ち人間性の極みへかかる其の要求は只佛によつてのみ充たされるのである、吾等は上人と感應道交する事によつて其絕對のものに觸れる事が出来たのである吾等は佛を求めて遠く千里を馳せるには及ばない上人の偉大なる人格と感應し其嗚呼ればよいのである即ち阿彌陀は上人の人格に表現されていつた吾等は上人を通じて其慈光に浴する事が出来たのである。

### 辨榮上人を思ふ

大阪 豊田 生

昨秋、祖山に於ける御別時で余は初めて上人の風貌に接し親しく御教化を蒙つたのであつて密かに自己の宿願を悦ぶと同時に又僅か一回の御別時で上人と永遠の御分れとなつた事を悲しまざるを得ないのである、併し余には此一回の御別時が實に終世忘る可からざる印象を刻み得たのであつて、當時余は暫に偶然に御別時に參加し得たので、元來閑暇に乏しい余としては、實に在外であつたのである、余は幾度か上人御指導の御別時を耳にしたのであつたが、實の處昨秋は之に参加して親しく御指導に預りたいと云ふ氣にはなれなかつたのであつた、ところが云ふ云ふのが、昨秋は何となく上人に對する敬慕の念と、法治の念とが漲り、握き兼ねた處へ偶然にも暇を得る事が出来たので單に上人の御指導を蒙る事が出来、實に暗中燈を得たるが如く、其深なる法悦を感じ、爾來上人の慈恩を感泣し敬謝するに至つたのである、余は此法悦を何うかして他にも分ちたいと考へ、同志と謀り直接上人にお願ひ申し、幸にも大阪に光明會が組織する事になつて、上人も舊臘十二月五日には是非御指導の爲御來阪をお約束されて居つたのであつたが、何んたる不幸か四日に御遷化の通知を得、五日の別時には上人の靈位に香花を供へ、哀愁の涙と共に報恩の爲の別時とならんとは、實に思ひも掛けざる事であつた、併し上人は常に無常を諷した、嗚呼悲しきは悲しみであるが、吾等は之が爲に上人の御精神を忘れてはならないと思ふ、嬰兒は已に上人に育まれ立たなければならぬ時が來たのである、吾等は上人の御遷化を以て、唯單に哀愁の涙に暮れて而已居る可きではなからんと思ふ、苟くも上人の教化に觸れ、上人の御抱負の一分を味ひ得た以上、上人の御遷化を以て寧ろ吾等に對する如來の恩寵と見る丈の用意があつて欲しいのである、上人の血は眞に吾等に通ふて居る等である、吾等は何所迄も上人の御恩を徹底せしむる事に努力したいのである、之が眞に人生の意義であり、人生の歸趣である、上人は終身最も勇猛精進に吾等をして眞實なる自己を得せしめんが爲に偉大なる動力を與へ大宇宙の精神に融合せしめ國家的に社會的に眞に意義ある人生の大活躍を實現せしめたいが爲に獅子吼せられたのである、上人の教化は實に生氣激濁たるものがあるのである、如來は一切を包容し、一切を救済し、一切を生育せしめ、一切を降伏せし居るに居るのである、今や宗門の大吾人を喪ひ、寂めて迎へた大正十年は、我國の歴史から云ふても何等か深遠なる覺悟を我等に促す様に思はれる、此時に當り上人の御精神は、吾等が自己悟了の裡に、永遠に活き活躍せらるゝので、眞に此點に目醒め得てこそ、上人に對する報恩の意に適ふものと思ふのである。



涙の雫

鎌倉 照子

娘の難病に氣も心もそらなる折、偶然した御縁にて山崎上人様の御尊來を頂き、其折は母子共未だ何んの御法話など何ひし事なき身に種々と病める娘の氣を引立御導び下さり、私も其々に有難く或時は三日も御留錫頂き毎夜毎夜御膝下に御教化賜はり居る内、娘は去る明治三十九年に此世を去り、其後は世に何樂しみ無き私を又さまへにお激し下され、娘の死は大御親様の御旨にて、其を清度の御方便なれば、つとめよ〜との御仰に、私の聞き胸に、光明さしとせ、以來十幾年毎一年一二月一度娘の病氣前より起居不自由なる病氣にかかり居り候ため、私も實に有難く存じ居り候。私の良人も一度娘の病氣前より起居不自由なる病氣にかかり居り候ため、此二十年近き御上人様の御教化に預りながら、一回の御供も叶はず、又一度は御別時にもご心のみはやり候へども、病人のため何時も惜しき思ひに泣き居り候。夜も有之候へども、私に與へられし務を果し候時は、心置きなく上人様の御供を願ひ御弟子として頂き度く其折を樂しみに良人の看護に日を送りし折柄、思ひ掛無上人様御危篤の電報柏崎より参り續ひて翌日は御遷化との御報に接し、實に何んとも申へき言葉も無只一人涙にくれ居り候、併し是皆大智なる大いおや様の御はからひなればと思返し一日一日とふる程に段々上人様の御教旨御在世の頃よりも深く心に浮び來り、矢張自分の胸には上人様の御座します事、相分り心の嬉しさ停めがたく、此上は、私の務めたる病人の看護なしつつ、心の中の御上人様に御すがり申さんと覺悟致し居候、過日十二月遊御送り被下候ひしに、任意投稿せよとの事御記載有之候折柄、病人又々不長にて時日もせまり或は締切に間に合はずとも存じ候へども、心に浮び候まゝ御はづかしさをかへり見す急ぎ候まゝに御送り申上候。(大正十年一月七日)

御滅後の實感

伊勢 齋藤 妙珠

御上人様の御入滅を慨き悲しみつゝある夜、夢に上人様は御浄土の蓮臺上に在まし美妙な糸を十方に散布なされ、首に微妙なる御幣にての給ふ「是は念佛の糸なり、衆生念佛すれば、我是れを引く、念佛する者は必ず浄土に來るぞ、現代の人は時是れ黄金と云ふは誤解なり、時は是れ念佛でなければならぬ」と御口を閉ぢ給ふと見て覺めたり。ア何たる尊と云ふ御默示で有りませふぞ、妾共は何時此御教示を嚴守て、作佛度生の活躍實行を致す覺悟であります。

隨行當時思出の一節

好月 女

尊い、我が聖父上人様は御遷化遊ばされました。承はるるに消らかな壯烈な御往生に私共の生き行く

申上げました、聞けば一人京都柳原から降つて行つた事もない東京に居るといふ娘の許に行くとか、所費を二の腕に纏りつけてあるのを示しました。働いた娘の様子を常人は一向平氣で聖者とも知らずお上人様に年を聞いたり念佛を勧めたりして居ります。お上人様はいろいろと世話をしておやりになりました。やがて「寢なさい」と私の差出す袋の上に御自身の手拭をのせて枕としておやりになりました。翁は「極樂極樂」といつて念佛申しつゝ眠りました。暫くして起き上つて懐から懐パンを出して嚼りながらお祈りの積りがお上人様とお側に居りました私に無理につかんで呉れました私に懐きたなさに始末に困りました。そつと懐紙に包んで洗面所に參つた節、窓の外へ投げ捨てました。岡府津も近づいた頃、お上人様はいとも敏捷に氣付かぬ内にそのパンを彼の半ば開かれた懐にお投入になりました。翁は其を知らずに向口を動かして居ります。私は其れを見て心から自分の行ひを羞ぢると同時に善き教訓を得た事を歡びました。お上人様は「時機を待つといふ

○アー御上人、アー御上人

笹川市兵衛

私も取る年波につれて、肉身はおひく〜と滅亡に近づけども、御上人様の尊き御導きに依りて、心は何時迄〜も靈光を受け得る仕合ものになりまして、何時なりとも、せめて御上人様より、先きに「おや」の御膝下に往くつもりであつた。然るに思ひもよらぬ今度の御別れ「アー御上人、アー御上人」呼ぶと還りたまはぬ事ながら、それは私の靈耳が低いからであります。拜まんどすれど觀てまつることが出来ぬのは私の靈眼が暗いからであります。大慈悲光明の尊き御力は昔なく、御上人の靈力に依りて私共會員へ一層強く興へくださるに違ひないと確信して居ります。何卒御みすてなく、私共を迷夢から一層強く醒めさせてくださればお願致します。私も今後老骨に罹ちて、御上人に對する報恩の萬一を誓ふて止みませぬ、南無無

○山崎辨榮上人と悼み奉る

霜 島 喜逸

靈界必ずしも人物に乏しいと云ふのではないが吾が辨榮上人の如き大徳の人は稀であらう嗚呼辨榮上人に御遷化あらせ給ふ愚生の上人を知つたのは大正七年の春だつた辨榮二處禪去年十一月再び上人の慈眼に接し私の學校の佛教青年會員と共に親しく人生の趣なる題下に四日間の連続講演を御願ひした思ひは、上人最後の大説法であつたの嗚呼吾等は何時と上人と因縁が深い事だらう加ふるに大聖辨榮上人の御臨終に親しく侍する事ができた上人の御臨終は神聖で平和であつた無言の大説法であつた。嗚呼上人は我に御遷化になつた上人より親しく教を受けし吾等は何をなすべきであらうか上人の教へ給ひ

(一)宇宙の大法に則り最終善に到達す(二)個生の伏能を開発し人格の完成を期す(三)各個の完成は一切と共に安寧の理想國を建設する事である。確信す同時に精進努力して上人大徳の聖旨に酬ひねばならぬ。  
南無阿彌陀佛

### 信仰の恩師辨榮上人の御遷化に就ての感想

前田 誠月

私は日頃辨榮上人に憧れ其徳を慕ひ隨進上人が宗祖の御教訓の其徳を唯仰で信せられた如く私も辨榮上人の御教の其の儘阿彌陀如來を絶対救済の御親と深く信じ其上人は御親の垂述たる生佛にて如來の眞髓を宣傳し玉ふお方ご常に悦び居る處圖らざりし上人は婆娑の化縁盡き玉ひて去る極月四日正に極樂に歸らせ玉ひし事を法見立川開上人より聞かされし時私の精神は唯上人の死てふ一字に投げ込まれ大悲の慈父に見

より救済されつゝあるを深く信ず「ごも見ても又起きそよな涅槃哉」此句真とに其意を得たり今は靈の上人は一切衆生の前に立つて日夜不斷救法あらせ玉ふを思ひし時其説法は一人の爲なり人之を自分の爲と思ふ時其説法は其人の爲なり各自之を了する時は一切衆生の爲の説法なり尊き上人の御遺訓なり嗚呼我を超越し玉へる辨榮上人の尊靈。初は一切衆生を長へに御導き玉はらん事天を仰ぎ地に伏して尊靈を拜し奉る南無阿彌陀佛所成の徳を皆様に告白す。

### 辨榮上人御遷化の前後に就て

土屋 観道

私が辨榮上人の御病氣の事を承つたのは十一月二十四日名古屋の梅香院の別時三昧會中のごことであつた。同廿七日桑名光徳寺で東京より上人病重しとの電文に接したがいつもならば一切を打捨て、馳参し度

捨られた如く夢か現か自己忘失の状態で上人の御遷化は今更の様には悲みの淵に私は沈ませられき。唯上人生前には有縁の衆生を救済せんには孔窟温まらず聖突燐ますの語の如く其御教化に専らなりしは十日十指各人皆知にして其遊履し玉ふ所は有無情を問はず化を蒙らざる者なく其徳を仰げば深き罪障掃のそれよりも高く其慈悲を望めば深き罪障掃のそれよりも深し人に接し玉ふを見れば一偏淨土の友の思ひせられ大悲のオヤの光明の懐に憐愍の日燈をする同體同心の威あらせらるる然るに今や上人は六十二歳にて本家に歸り玉ふ惜むと云へども止まり玉はず呼ぶごも歸り玉はざるを云何せん思ふ言ふ勿れ無常上人。宿業の所感なり肉身の上人は逝き玉ふと云へども靈の上人は長へに不滅にして其尊靈は法界に在まざる所なく生も南無阿彌陀佛死も又南無阿彌陀佛有縁の衆生は度し所し其末度者の爲に上人の尊靈は念佛と共に恒存して得度の因縁を爲し玉ふ生前死後念佛一貫の上人は今や還來穢國して衆生たる事を思へば念佛す其所に尊靈の上人

いのであつたが行先々に已に先約ある身の心に任かせぬは何よりの悲みであつた。如來の大悲と上人の御心とより察すれば傳道が吾人の生命である。然し人情としては一刻も早く参りたかつた。けれども又一面には柏崎から私あて通知がないといふことは上人にも私のある所御存じのないと思へば又御重徳とは思はれなかつた。然し電文を見てはさすがに淋しくて淋しくてしやうがなかつた。其時電報紙に「上人と自分とは慈光宣傳の爲めに殆ど一日として同席に侍る日ではない然し心は常に平穩であつた然るに今や上人病重と云ふて心何となく平かならず思ひは常に上人のみとに走る。嗚……上人よ我淋みし我淋みし、南無阿彌陀佛十一月二十七日と記した斯くて四日市で上人の病やよしのことと云つて、一同や、安心して十二月一日京都の百萬遍についた。然るに三日上人危篤との電文に接して、急後を百山老師に御願いして四日の晝に柏崎に着いた。然に上人は已に此朝御遷化であつた。妻より聞けば上人は三度も

私を來た來ぬかと御尋ね下さつたことである。慈光宣傳の爲めとはいへ、今から思へば何故に一刻も早く一切を打捨て彼地に行かなかつたか、返す返すも悲しみのきはみである。

嗚！ されど静かに思ふ。人生誰か死なからんや、英雄豪傑も聖人も君十も貴賤も貧富も男女も老若も押しなべて必ず來るべきは此の死である。日頃より壯者を凌ぐ健康の上人にも死は必ずある可き事を示し玉ひしか、夫れにして其の事業未だ半にも達せずして示寂し玉ひしは何故か。上人の壯健如來の御心に叶い玉はざりしによるか。否々決して然らず、恐らくは是れ後を後人の大業として其の効を譲り玉ふの聖旨なる可きか。

嗚されどそれにつけても其の後を續ぐ者は誰ぞや、口に光明主義を云ふ者は多し、されど未だ其を以つて生命とする人は少し、靈界人なきの今日、吾人は上人の如き靈界の偉人を亡し悲しますにはならぬ、されど如來の慈光と上人の御人格とは吾人の心に今尙

さつたのでございます。毎度か背いて逃げ出さうとした私も御頭この限ない御慈悲に救つて頂いたのでございます。お上人様が此の夏、お急しい中からお道し下さいました御手紙の中に、無常迅速のこの世なれば、速に信仰を求めて眞實の生活には入れと仰つて下さいましたが、其のお上人様が、四月と經たぬ間におかしくお遊ばさうとは本當に思ひも掛りませんでした。

嗚お上人様。あの偉大な御靈格の所有者でいらしたお上人様。對する人接する人の全てに言ひやうない感じを興へていらしたお上人様。春の海の様な穏さうしてあの空の果から地の果に充ち輝いて居る春の日の様な和らかさ暖かさのお上人様。信念の向ふところ恂々乎として其處に必ず新しい、道新し世界を切り開き打建て、いらしたお上人様。お上人様はも早この世に於いて再び私共に現はれお教をお垂れ下さいますことばございませぬが、不滅なる其の靈は永久に私共の中に生きていらして私共を御

働いてゐることを喜ばずにはゐられない。願くは我法の友人よ是心を以つて如來のみもとに立たんかな。

### 嗚呼我が慈父山崎 辨榮上人

紫 明

お上人様突然の御遷化、唯々夢と云ふより他に譬ふべき言葉を知りません。あのお優しいお上人様が、何うしてかもう速に召されていつておしまひなされたのか、思ひやる度に新しい涙が湧きます。柏崎から頂いて歸つた御寫眞に朝晩對つてお念儀いたします。物を仰せられない御うつしゑでございませぬが、さながら生きてお出で遊ばすやうな其の御眼からは御慈悲の光が溢れ出て、胸の底の方に迄込み込んで参ります。あ、何と云ふ御懐しさでございませぬこの御慈悲こそ、頑迷な私の心を碎いて、其處に有難く如來の光を仰がせて下

導き下さいます。嗚悲こそ彌陀。これこそ我がお上人様のお歩みなすつた道。自己を離れた愛の花が咲く所に私共はいつも儂いおなつかしいお上人様の本當のお姿を拜すること出来るのだと信じます。唯一人の慈父お上人様とお別れましたことは眞に血の涙をしばられる心地がいたします。けれどそこに經理を成じ恩寵を思つて想め且つ勵まされて居るのでございます。

### 御病中より御遺骨 奉迎まで

當麻光明會員 慈 雨 樓

「上人病重し」の電報を受けましたのは猶の手もかりたいといふ秋の忙がしい收穫の霜月仲の八日の晝時のことでした。いつもお達者のお上人様にかくあらうとは思ひもよらぬ驚きでした。寺では、取り敢えず末寺

の方で世話人三名で急遽柏崎に向つて出發されました。既に馳せ集つた私達は學園の生徒と一しよに本堂に集つて眞心をこめて御病氣の御平癒を御祈願申し上げました。斯した私達の誠心をこめた祈りは如來に答へられたものが御親湯御良友の報を得て病めた胸を撫で、安心したもので、然し二三日が尤もお大事で承はつた。私たちは猶も御祈願を續けてみました。然るに十二月三日俄然御病氣の飛電に接して一同は恐懼惜しく所を知らず學園の生徒光明、會長は勿論音樂講や雙盤講其他檀徒の方々が續々參籠され稱名の聲は木魚の音に和して赤誠祈念を凝し夜を徹しました。天の時も地の利も人の和に如かずと聞いて所りませぬ私達は、このあり様を見た時必ずお上人様の御回復遊ばされることを誓ひませんでした。

然るに翌朝御遷化の悲報に接した私達は木魚を擲ち槓木を捨て、あまりのことに涙も出ませんでした。密葬式の日には折から降り出した六花の曼陀羅華にこの世の穢れは清められ木々の梢には時ならぬ白銀の花

が咲きみだれて阿彌陀佛國の淨土宛からの莊嚴を演出しました。この日會員生徒其他百餘名本堂に集つて御密葬式がありました。斯く急御遷化の御事になりました。過ぐる日の雪は未だ深く、寒も一入厳しうございました。二里に餘る雪道を五百餘の檀徒村内各學園學校職員等老幼相扶けつ、橋本驛までお出迎へ申しました。

目のあたり御遺骨を拜し奉りながら、まだ眞實とは思はず唯々稱名聲のみ治道にみちてゐました。愈々無事御歸山遊ばれて御遺骨とお寫眞が本堂の正面に安置され一同其の前に長跪合掌した時、今までこらへてゐた心が弛んだものが會員生徒をはじめ奉迎者はいづれも感極つて嗚咽嘔吐して稱名の聲へよう出し得ませんでした。そして禮拜儀もとぎれ／＼に御回顧申上げました。然しながら其の清い涙の中に其の嘆きの内には強く、深く、そして強い御恩の決意が閃いてゐました。今や其の當時を想ひ出で轉々感慨に堪へません。

—(37)—

### 上人の御徳を敬慕する私の心

光明學園生徒 植村榮輔

冷たい死を前にして力なく淋しく孤獨と戦ふ老人の姿を見ると、私は何時も「老人を敬ぶ心」が眞に勃々と湧き、限らない懐しみを覚えずには居られない。枯れた様な肉體には何人も敬服すべき経験があり、その禿頭の中にさびしく光る瞳には過去に緘へ上げられた尊い光がある。如何に醜い衣を纏うてもそれが老人なら、好意を寄せずには居られないのが私の常である。況やそれ等の老人達を超越した、教界の偉人として靈光を世道人心にそそがれし上人に於てをやである。無限の靈光の輝きが瀟々洒洒なる人格のその中に、

信仰の閃が溢れて居られし開らかな御尊體に接する度に、恰も神の前に誓願をなす時の如き感起り、汚れ多い心も次第にその汚れを解脱して、やはらかな敬虔な、我利を離れ俗域を超越した人、本來の清純な心に立歸るのであつた。ましてや今は御遷化なされし後より、應びまつる時には、それが一入眞摯な心に映るのである。

何時もごつしりなされたその御姿は、そとから上人の敬慕なされし釋迦牟尼佛を想像された。あゝその圓滿な御姿から想像し推察しても、如何に偉大な尊嚴な慈愛が心底にひそませられたか、知る事が出来る。ひとへに御身を顧みられず、世の小さき己れの名譽我慾に汲々たる人の心を、此の世の悪魔の手に陥れる人々を、神の如き愛の光にて救ひ一代の人心をその暗黒界より大慈悲の御手を以て、光明界へ出さんと、日々夜々御化導におせはし、心碎かせられてその中に一生を送られしを思へば自分等のうかつなりし心の、下劣さに泌々と至心に懺悔せざるを得ないのである。

—(38)—

### 辨榮上人と光明學園について

當麻山光明學園 吉田庄七

嗚呼お上人は遷化なされた。然しそれは永遠に遷化なされたのではない。光明、輝く御上人の靈魂は九天高く宇宙のあらゆる有情非情に至る迄を照らして居て下さる事であらう。人情浮薄な此の時に、此の偉人を失ふたのは實に國家の爲、吾世界の爲に慟哭せざるを得ない事である。然し從らに悲歎に暮れて居る時でない。心目を開くべきである。肉體には一度は入滅の時期あれど、靈魂は永遠に滅すべきでない。永遠の生命である。エターナルライフ、である。永遠の生命!!!

此の御計畫のために、私が千葉縣木下町染谷氏宅で、お上人にお目にかつたのは其年十一月の中すぎ、阿彌陀佛に染る心の色に出で、梢のうつくしい頃で、はや夜の十時頃でありましたが、それにも拘らず、お上人様はいつもの通りにこやかに、お慈悲のこもつた御遺容にて、いたくお喜びくだされて、いろ／＼と前途の計畫、希望等を語られました。其時のお上人様のお話には、一つには光明主義宣傳

—(39)—

の士を養成なされ、又一つには地方の青年を教化して、風教の中心となし、延いては模範村をつくり出したと云ふことであります。

而して我等現ニ活キ動キ學ブコトヲ得ツアル所以ノモノハ一ニ天恩ノ恩恵ヲ受ケルニ依ルコトヲ深ク信ズルト共ニ一切萬物ノ恩恵ヲ報謝シ堅忍剛毅ノ氣象ヲ以テ最善ノ努力ヲナサンコトヲ期ス

宣 誓  
一、教育勸諭ノ御趣旨ヲ奉戴シ人格ノ修養ニ力ヲ有  
用ナル人物ヲランコトヲ心懸ケン  
一、自治勸勉親切ノ良徳ヲ養ヒ和合協同ノ美風ヲ成  
シ、勞働ヲ重シ儉素ヲ旨トシ地方ノ振興ヲ以テ念ト  
セン  
斯ノ如キハ人生ノ目的ヲ達シ國家世界ニ貢獻ス  
ル所以ノ道ニシテ實ニ我が學園ノ精神骨髄ノ存スル  
所ヲ我等一同至誠以テ之ヲ實踐貫徹セントコトヲ誓

實に學園はこの精神を以て出来上りました。上人の常のお言葉には、今の世の教育の多く知育に偏して徳育監育の方面に缺けたるは、賢へば片足を以て歩まんとする者の如くであるお申されました。そして將來學園の發展のために、基金をつくるべく御心配なされつゝあつたのですが、此度にはかに病魔のため御他界をさされたことは、眞に申すべき言葉さへもございませぬ。

—(40)—

ありませう。上人の御遺業の一として、ごうか之れが永  
續發展の道を請ひ度いもので御座います。

(大正十年一月九日、日曜午後)

### 御上人の遺文を拜す るにつけて

長岡 若葉 莊造

欽使御遺業により昨日無事に着候、滞在中は  
一方ならぬ御保護之下に病氣も疾く快方に相成り候  
御申候、歸京の上情願すれば、實に不思儀なる  
御因縁に依り外護を被むるのみにあらず、貴君の至誠  
心により光明會員なる清き同胞衆を得たるは如來  
ふ大いおの聖意とは申すなからまことに有難きこと  
に感候、新潟縣の中樞たる長岡市に新しき光明の  
宣傳の曙光を見るに到りしは全く大いおの聖意と  
は申ながら貴君が如來より撰れて此事に従ふべく使命  
を被りたる縁によりてと存じ殊に辱なく存候。

新らしく紅葉を拜すその如く如來の光明の傳道  
も如來は久遠成始無終の光明明者にましませご  
も其の如くの光明の宣傳はまた新らしく新らしく世  
の人々の心霊に照されはならぬと信す。念佛は是如  
來の清淨光觀喜光智慧光不斷光なれば念佛衆生  
は念々に此の清淨光觀喜光の光明に清められ伏  
々々々に精神の日ぐらしを爲せて下さる。期清淨歡  
喜智慧不斷を拜する光明名號なれば念する衆生は  
實に清淨となり觀喜となり智慧となり常恒不斷の聖  
意あらはす御らきをなして下さる。信者のみにあら  
ず此の信者の家はやはり清淨なり觀喜なり平和なり  
幸福なり一切の慶事は期光明の在る所に格る。一切  
の慶事は期光明のかけたる所に發す。願くは  
長岡の清き同胞衆光明のなかに彌々平和と光榮とな  
らんこと願候。御禮旁如斯御座候願くは諸の同  
胞衆に宜敷御傳わらんことを

十八日 羽賀虎三郎様 山崎 辨榮

現今物質的の方面に益々發展するに隨つて一般の眼  
が唯表にのみ注ぎて自己内觀を忘るゝに到る傾向ある  
が如きは今日の流弊にて候、爰に於てか如來に撰ばれ  
たる先覺者等によりて内觀性を開き永遠の生命を發見  
して人々人生の全きを得るに到る様に成候はば實に  
御上人の幸にて候、御一家の如く我來君の如きまた大  
森御兄弟の如きは疾に如來より撰ばれたる同胞に  
て候、また法中上人あり實に何れも得がたき同胞  
にて候、實は歸京の上今日當寺に於て目撃する處從  
來の信者の集りは種々の流弊がありて眞實に生命ある  
核のある内容實質に滿たる信者は出来ず候、如來より  
新しく使命を被りたる同志によりて新しき宣傳の道  
を開くにあらざれば如來の思召に叶へたる信者は出来  
申さず候。

大陽は太古の古き昔よりの物なれども毎朝々  
々吾海の水に注ぎて四なる露を洗滌しながらいかに  
清らけく潔く快く活々として昇りなされる。千年の  
古樹木も毎年新なる香を薫りつゝ花は咲出す。また  
此の御遺業は大正七年秋光明會三昧會を結了し御禮傍羽賀君  
に賜りたるものなり

我長岡光明會は設立約一年にして不幸御禮傍井上  
人を失ひ光明會の前途を悲觀致しましたが茲に如來  
の聖意とは申ながら幸に羽賀君初め其他同胞の至誠  
心により清き同胞衆を得て漸次盛大に成りまして誠  
心で居ましたが好事多磨しと云ふ可きか我等の教の  
みに親と習み境界の太陽として仰ぎたる會長山崎辨榮  
上人には昨年剛走四日遠に無量壽國へ御歸り遊されま  
して我等は暗夜に燈を失ひたる如く、抱なき船の如  
くで只茫然自失爲す所を知らずと云ふ有様であります  
斯く失望落膽して居たどて仕方がありませんから、發  
奮して御恩報に勉めねば相濟まぬとつくづく考へま  
した、而して御上人より羽賀君に賜りたる御手紙は實  
に我等日常服膺して光明の中に平和と幸福を得べき  
有難、勿論なき御精神が溢れたるもので光明主義を  
遺憾なく表したるもの、再三拜讀して以來之を思ふ時  
は御慈愛の温容彷彿と現出するを覺へ常に懽喜極る

### 追 想

唯心坊法隆

私は明治三十年前後物質萬能の學說が國內に横溢  
して宗教の權威は地に墜ちました時代に、非常に煩悶  
に陥りまして不眠の状態にて東西の宗教や哲學を研究  
しましたが益々迷宮に入りまして、遂に心霊の實證を  
試みんと入山修道を實行して居りましたが一寸曙光  
を認められた時、阿らすも、上人の福音に接して救はれ  
ました。今に其喜びは精神の深い深い奥に笑を含んで居  
ります。

宗乘を講究するに二祖三代の釋義を指南とするは當  
を排し玉ふ、温容玉の如くにして法門の實義を談せら  
るゝに際しては毫も假借なく堂々として眞偽を判定し  
給ふを拜して私は渴仰の情禁する能はずであります  
先年或る學者に遇ひましたら盛んに見佛の主張を新  
義の如く思ふて批評して居りました、私は修養の功  
果を説き鎮西、要の精要を勧め更に念佛三昧の實行を  
激励しました其後愈見しましたら態度一變して切りに  
念佛を唱へ、上人の高學博覽と三昧實修の尊きをた  
三念願力の餘光と拜し奉ります。

### 南 無

松本 古月

嗚呼永遠の生命と無限の恩寵を與へ給ひし、上人は  
遠來を約して今や御慈父の寶國に歸り給ふ再會何れの  
時を期せん感感最も深し、南無阿彌陀佛。

上人御遺化の禱り御前に於て隨行の李仁鏡君と日韓  
併合後の感想を談せし時、上人給く「大事業を爲す  
には必ず犧牲ありて成就す、日韓併合は伊藤公が犧  
牲なり、淨土教の今日ありて我等が永遠の生命を與へ  
玉へるは聖法然の流罪の犧牲に依る。我が光明會も  
二三の犧牲ありて功を奏するなりと、仰せられて兩拳  
を壓められての勇義とく有り難し、今や上人犧牲の  
牙驕となり玉ふ、實に感佩深し。

上人或時不肖に問ひ給はく「大字宙は如何なる者か」  
不肖答へらく「全宇宙は透明體なり」と、其時上人滿  
面に笑を含ませ給ひ、渾身に力を入れて「然り透明體

でなければならぬ」と、更に一層力を込めて「其の體は何か」と不行は直に「唯一絶対の如來のみ在す」と答へれば御満足の御顔を拜したりき。

或時上人示し給く自分は佛であると思へば佛様が惡事をせられし事なき故自分は佛であると思へばよと、不行は誠に如意珠を頂きましと御言を述べて退き、本尊前に詣りて念佛三昧に入りき。

大正九年十月廿七日期し御文に、其の靈典は大宇宙に滿ち満ちたり、今日より外に心を移さず、大宇宙の直説法を聞け、辨業などの説や文章は到底直説法を寫せぬ、依て一心専念に「オヤ」の御名を唱へて味ふより外なしと。是れが上人最後の遺教と拜せんとは、ア、南無阿彌陀佛。

### 山崎辨業上人と 三好愛吉閣下

越後 渡邊 庄輔

ましたと申しますと、先生が渡邊と三好が伺ひましたと申上げて下さいと言ひ直されました、暫くの後御上人が御出迎下され御坐敷には特に床の間を明けて御着坐なされました、御互に御面談の好因縁を悦ばれ、まづ御上人から今迄如何に御修業なされましたかとの御質問に、對し「先生は大學に在學中比叡山に登り數ヶ月佛書を拜覽し其後禪の修業をしてし聊か得る處あり人に得意の時代もありましたが此頃過分の重任を仰せ付けられましたから益々未熟な事を感じましたので更に小供に還つて修業したい考であります」と御答にりました。

そこで御上人は神と念佛とは修業の道行が異なるので丁度富士山へ登るのに、御殿場口と吉田口等の別ある如く、別ける麓の道は多けれど同じ高峯の月を見る哉で、結局同じ頂上へ行くこと云ふ事について、頗る懇切に一時間と二十分に涉り、詳細に御説明下され、其間先生は兩手を膝の上に置かれ、時々ハイハイと御答へしながら、熱心に聴きこられました、此光輝ある

隠れたる偉人稱徹老師から御上人の高徳を承り敬慕の餘り御佛に祈願を籠め御行先を尋る事五年、幸ひ柏崎で拜謁翌年拙宅へ御出を願ひ、御遺經の際特許を拜し有難きに感泣したのは、七年前で有りました、其後毎年御光來御化導に預りました事は、私一家の幸福と悦んで居ります、嘗て御上人には一米粒に般若心經と一枚起誓文を御書になつたご承りましたが、只々驚くの外はありませぬ。

回顧すれば去大正七年三月前皇子傳育官長三好愛吉先生を御訪した際、一度御上人に御目にかかり度との御話がありましたので、幸ひ東京に御滞在申故明日にも御案内して参りしやうかと申しますと、それでは禮を失するから二度目から御招待するとして、今回は私から伺ひしやうとの御仰せ、翌日御上人に先生の御希望を申し上げますと、いや、私から伺ひしやうとの御話、然し再三御願をして、結局先生が御訪する事になりました。

翌日御訪して、御侍者に三好先生を御案内して参り

會座に列つた私は、真に如來の恩寵を感謝し出世間の福分を敬慕しました、御暇をして門を出ると、直に先生は一見凡僧でない事は理解したが、一時間餘の御話中爪の垢程も浮たぬ處のないのは、實に敬服の至り、大悟徹底された御師方には幾人か拜謁したが、淨土門では御上人の如き大徳に始めて御目にかつた、今日は久々に森田悟由師から御話を承つた時と同じ気分がして、誠に有難かつた、非常に悦ばれました、先生は昨年二月流成で逝去せられたが、御存命中御上人に御紹介申上げた事が、先生に對する報恩の萬分の一になつたと悦んで居る次第であります。

近代禪門の大宗匠、渡邊南隱老師が、嘗て御上人に御逢ひになつた後で、徳に菩薩の化身である、今時淨家で斯かる大徳があるとは、有難い事だ、大に賞讃された由、承りましたが至人達者を知るとは此事でありしやうか。

常に希有難遇の思をして、禮問すべきを遂げたく、忘けて居ります間に突然の御遷化、實に遺憾至極、

—(46)—

—(45)—

### 生を體得せる吾等が 聖者上人

相州 松 幽 溪 窟

御臨終の際アノ力強い純一なる御念佛の御業を拜聴して、熱涙を以て御見送り申上げた事が、永遠に忘れ難き深い印象となりました。

光明主義を奉ずる者は、辨業上人御一代その御化導の足跡を拜し奉るといふ事が非常に深刻な、そして嚴肅なるものを包蔵して居るといふことを何人も考へて居る次第であります、それと同時に光明主義が、萬邦の理想、人生の歸趨に對して一大使命を持つものである、といふ點から考へて、色心の伸展と擴大に如全に生活を希念して居る私共各個人も深き反省のもとに、考へなければならぬ問題であります。即ち「念佛行脚の辨業上人」といふ見方より歩を進めて「仰いで本地を尋ねれば四十八願の法王、伏して聖迹

る欲求が潜伏して居る。その親得の境には飛花に自己の衰兆を感じ、野草に自己の息炎を觸るのである。塵の親昵の感は愛に基調する、愛は一切を抱擁し味識して其眞價を體驗しなければ休息しない、愛は眞價の體驗を遂げれば之を棄外する、而もそれが個性の表象として無意識に極めて巧妙に流星の如くに發出せられる私は上人の御化導の足跡を凝視する時、上人は眞に生れ來れる人で有つて、眞に生む人であり、生れる事の運命が上人の生命で有つたのです。寔に上人の生は生命自らの發露であるから教理の口述や教義の解明に奔命せられず、身を證することが其生であつて、生の完成、生の寶貝の聖者で有つた。そしてまた愛の眞現者で有つた。故に運途には世間には追難と苦患の極度であつたけれども「異安心呼はり」の中に、却て敵の爲めに涙と祈りとを捧げて法悦の合掌と眞傳の讃歌とに法臘四十年の、灯を點せられた。そして永遠に不滅の都に分身利物の光を今現に放つて居られるのである。應!!!生に徹せる聖者は辨業上人であるのでありま

—(46)—

—(47)—

を問へば専修念佛の遺傳」と聖法然が聖者善導を讃仰された如くに、御遺骸の鎮靜に直導する時に吾人の眼前に、髣髴として現臨し來れる尊上人は、本師大聖世尊の再誕、末法の大導師なる靈格の聖者、眞に生を體得して歩々「白道」を「化身の歩み」に直進せられたる靈界正中線に直面の聖者であります。

生活といふことは要求の刺激變動と云ひ得るけれども、體驗の心事はしかく單簡に平明にも表し得ない殊に天地の眞に直參せる聖者の生命の流脈には滾々と湧出し來る大自然の生命直爾の發露なる常恒無盡の法性の淵源を見る。そしてその生命流の激蕩する處、愛と創生との二つの惠澤は流域を豊かに導きます。生命は一切を收蔵し攝取して、そして常に新らしきものを創造し産生する内的靈力の發露である、此の攝取すること創造することは個人を完成するに最も重要なものであります、私共の生の完成、生の實現、生の徹底の躍進の床の下には精神的一切を取藏し所有して自己の内に自己と合體して一切を親解直得せんとす

### 常在靈鷲山

奥村 辨 誠

……末弟は未だごうしても、恩師が亡くなられたといふことは信じ得られぬのであります。御遷化以來早や既に一ヶ月の日數を経過しました今日でも、末弟の心の何處かでは尙ほ常に、恩師常在の高き調へを奏なで居ります、そして恐らくは此の鋭き響きは千萬年の後世に至つても之を打ち消さるべき日は永久に有りえぬこと、深く自信して居ります。

末弟は去月二十八日の午頃始めて、恩師御重態の飛電に接しました時に、勿論非常なる驚愕と憂愁とに閉ざされました、そして親しく柏崎の極澤寺さんに看護

—(48)—

—(47)—

するに及んで一入の悲痛に襲はれました。が、末弟は此の激しき驚愕と悲痛の裏にも尚ほごごごなく恰も電光影裏春風を斬るといつた様な、恰んど不可思議にまで油断として張りのある大いなる落つきを感じておつたのでありまして、一概に夢ごのみ笑ひな玉ひそ、末弟は實際その御發病前後に當つて、恩師の温容に慈言に關聯する幾多の夢を見て居つたのでありまして、ケレどもそれらのものは皆此度の御遷化を鑑する様な、所謂の縁起の悪い様なのは一つもなかつたのであります。或は稻の夢とか柿の夢とか、又は齒の抜ける夢だとか。只だ今から考へて見ても些か不思議な思へば思はれないこともないと思はれますのは、平常に比して夢の回数が多かつたといふ事實位なことであらう。私は平常よく、恩師を夢見て居たのであります。又御有難の方々の中には道般の御遷化を既に直覺的に自感せられて居つた様に御見うけたいしましたが、どういふものか末弟にはその直感にうごくありました、然しいくらの心奥底でその様な鋭い不死の

叫びを開きつゝあつた末弟の心にも、十二月四日の黎明夜、暮の昇るとき寂然たる御遷化に當つては一時に急き来る千行の血脈に自も心も自失せん斗りの悲觀に悶えました、そのむかしありし日の、恩師が御慈訓御温容を想起しては誰れも限りなき悲歎の淵に沈まれることではありませうが、特に殊に末弟に取つて此の悲痛、他の悲痛に百倍することでありました、恰も中空高く煌々として下界の平和を祝福しつゝありし明月の、忽然として突發し來れる黒風暗雲の爲めに忽ちその明光を埋閉し終らしめられた様にもなき悲歎と限りなき寂寥とを痛感したのであります、さあれ、この暗雲寂寥の裏にも以然として月色煌々たるが如く末弟はこの憂愁悲歎の裏にも尚ほ常に、常在靈鷲山の高き叫びを自感して居つたのであります、末弟は今年に三千年の昔釋尊法華の會座に咫尺して、滅不滅の御請説を拜聴して居る如くいと特き感念に涙ぐれて居ます、曾て、恩師御在世の御前、前途有爲の人士にして往々天折する悲しき矛盾に付て御たづねした時、聖

意速かに測り難し、されども多くは思慕の因縁を以て有縁を導かんが爲めのみ御辨明下さりませぬ様に記憶して居ります。そして又折々、急がないうちが暮れて仕舞ふから、日がくれて了うからと度々末弟への強き救訓言でありました、末弟は自分が元來餘り健康の方ではありませぬので、これ何んでも多分末弟を激發し下さる御慈訓であること、斗りに拜聴して居ましたが、何ぞ知らんや此の御言葉のうちに御自身の御約束が御顯示せられつゝあらせられたといふことは夢にたに之を感じし得なかつたといふことを限りなき恨らみに思ふのであります、そしてこれ偏へに末弟不信の致すところを深く懺悔しつゝ在天の御靈に御詫ひ申してゐる次第であります。

さあれ、末弟は、恩師が今、日頃御懐がれ玉ひし大ミオヤの御らに笑ひ阿々として、此土に残し玉へる兄弟等の心行を守護監視し玉ひつゝ最後の日の來るとき本どの御約束を忘れ玉はず必らずなつかしきその御許に迎へとり玉はんことを深く信じて疑はないのであり

御眞體に觸れ得るの期はないことでありませう。明月を 眼がねはづして眺めけり 雲上なる月に心の棲みぬれば ありし吹く夜も のごけからまし

### 追慕の念禁する能はす

井上隆 森

去年の冬、御門跡殿下の命を奉じて越中へ旅せし時、某信者より御上人は旅枕に疲れまして、相時に御滞留なりと承る、左に如來の大使命に包まれ給ふ尊き御身なれば、やがて高岡市極樂寺にて拜謁せんものと、探合せ同寺を訪ひしに、佐々木上人が代りて來化中なり、之はと驚きまつりて、種々光明會將來の事どもを凝議して御上人の御念快を聆會しつゝ、次ぎの開催等に赴き如何と案じながら歸せしに、同らざりき十二月三日の夕まぐれ、自功に於ける本山布教の終る頃、御危篤との電報に接す、心耳忽ち狂はん

計りなり、取り急ぎて列車に乗り込み、何卒く温容に接し度ものよと焦慮し奉り、車の進むも氣のいらつくのみ、拍崎極樂寺の御門前に來れば、彼の白き位牌形の忌中報……ア！御上人は……遂に悲痛の涙は結ばれて、越路の初雪となりしか、淋しみ強き風に腹股を吹き、御上人の靈柩を送り奉る此時の悲しさ辛さ、淋しさ傷はしさは、生涯忘るゝ能はず、斯は筆にも記し得られず、口にも語れない……

### 各地短信

京都光明會、大阪光明會、新潟光明會、其他各支部に於ては、御上人様追慕別時を中陰の間、短くは一日宛長きは三日五日宛、夫々嚴修せられつゝあり、實に忝き事に候。

御上人の感化力は滅後次第に擴大されて、各地に租々尊き計費あり、莫くは、致大團結して、益々御上人の遺志を發展せしむ度候。

祖山法教科主催にて、去廿三日より三日間、祖山常任布教師の有志相集り、各安居念佛三昧會を修せられ法悦に入りし方も紛からずと云ふ。

○口稱と見佛(新刊發行は來二月廿七日、世に公にせらるゝと云ふ)。

辨榮御上人の唱導し給ひし所と、古徳の勸興し給ふ所と決して相違せざることを證得要樂するには、實に好指針なり。發行所(佛道交誼會)。

○來三月一日より七日間、祖山に於て、御上人滅後の第一回御別時を勤める事となりまして、中島老僧正を隨て御願ひ申し、御指導を蒙り度と存じ居ります。光明會將來百年の大計を確立せねばならぬのですから、何れの方も、充分御熱慮を盡す度に候。

たむけ草

親戀ふる子等が心のたむけ草
父しらしめせ母ようけませ

感想と追悼歌

桑名 高井 善成

當桑名の地は由來上人因縁の深き所にして、上人が
初めて此處に錫を掛けられてより、殆んど二十有五年
になりぬ、其の間、實に上人は宗祖大師の再來か、誠
は活如來か、幾多濁仰の的として、尊信措かざりし
が、この三年、上人が結縁暫らく遠ざかりしかば、
信者の方々、來春は是非にと昨秋以來豫望致せ
し甲斐もなく、再び温容に接することを得ざりしは、
誠に痛みても猶悼まじき極みにこそ、この度、上人號
御發刊につき、何か物せよとの勸めにより、南無阿彌
陀佛の六字を函にして、聊か追悼歌をよみ侍るにむす。

慘風悲雨

夏 山

うら悲し越路の冬は野も山もひたに曇りて雨降り續
御息の苦しき中ゆ遣し言あそばす様のいとほしきか
おもやつれしませし姿おろがみてすゝり泣く子のい
く非かある
御注射申しあげては今更に身を切る思ひ禮してぞ泣
臨終とて申す念佛を御手あげて勵まし玉ふあわれ尊
うつし仰せ玉ふも即教への言の葉なりき伏してお
ろがむ
御舌の痛く乾きて御訓葉のもつれ玉ふか痛はしきか
な
あわれ今は頼みの綱も切れてしを嗚呼御姿はさても
輝く
大柄や近づき玉ふ風吹きて永遠の別れを天地も泣く

南無せよとぞしへ給ひし筆のあと
いまは名残となるぞかなしき
無量壽のむかひを受けてむらさきの
くもに早く登りませしか
あまりにも早く別れに別れども
思へざりけり夢ごとくちして
みちびきし光は永久に輝きて
四方の開路を照らしますらすむ
たゞならぬ縁ならむ極樂の
み寺の庭にゆき給ふとば
ふ可稱智みな何事もみほとけの
みはからひなり南無阿彌陀佛

追 思

田中 教道

死出の旅一夜の宿を柏崎
山裡の功徳を積んだ遺骨箱
極樂を願ひし人の涅槃てら

障子開けて庭の面を見せまつる痛ましければ小鳥
も泣かず
みぞれ降る中を静かに渡ります鳥部の山の哀れ師の
君
御空をばじつと見つめて禮しつゝ喜び玉ふ姿尊とし
無礙光の如來あますと告げ玉ふうつゝになりて空を
おろがむ
電燈は消えぬ小暗らき燭の火に仄かに浮きし御顔淋
しむ
御息は静に絶えぬ禮讃を碎くる胸にとなへては泣く
○辨榮上人みまかりし折によめる
静岡 鶴谷 誠 隆 上
末の世の法のともし火きえはて、
よはごこやみになるかぞ思ふ
○御上人の遷化せられるを惜みて
救ふべき人おほければ彼の國へ
ゆくども早くまゝ還りてよ
さきたゞはおくる我をまたれてよ
花の臺の中ばのこして

別れてし行術に迷ふみなしこは
彌陀本覺の都に居るとたより聴く
そのこえぞ南無阿彌陀佛
○辨榮上人の御遷化を聞奉りて
能登 覺 平 上
草枕たびぬの夢のさめやらで
はちすの上ごさくかなしき
殘されし法の教のかすくを
あさな夕なのかたみとはみむ
○同 越後 守中長次郎 上
旅まらく種まきたてし仏の
はなちりぬとも光り榮へむ
戀ひ慕ふ妻の花はちりぬれど
やがてはあむ我心かな
○蓮友辨榮上人が越路の旅に往生し
給ひきと聞て 東京 羽田 尊 穆
とく來ませしかし佛弘めに
嬉しくも尊かりけり身をすて、

○法藏寺の伽藍を眺めて
故辨榮上人を偲びまつる
長岡市 と み 子
まし世のまに伽藍はそびゆれど
ひじりは常磐に來まさぬものを
みにびだに逢ひまつらぬになそもかく
おんおもかけの忘れえぬにや
植えまし法の若苗つちかひて
たかきみ旨にそまつりてむ
○御短冊を拜して
染めまし筆の跡を取りいて、
ひじりの君をしのぶやかな

宇宙と我と

小川 橘 川

宇宙に偏滿して、
三世十方を貫ぬく、
大法、顯現して義となる、
○ 辨榮上人にたてまつる

ね佛弘めし君がいさを
○再會を樂しみ待れし生前の文あるは
其詠草佛喬などをおろかみて
同 人
み佛の心みたる筆の跡
いまは形身となりけるかな
○恩師辨榮上人越後路に逝かせ給へりご
承りて極樂寺へよせける
下野 渡邊千代子
國はあれど寺はあれども君ゆくや
むつのはなふる極らくのその

我は宇宙、宇宙は我。
我死して宇宙に歸る、
生滅起伏、素これ實相、
何を喜び、はた何を悲しむや、
悲喜を超越する時、眞の我あり。
○ 我は覺めたり、
久遠の悲しみ、永劫のなきけ、
哀涙禁めぬ涙のころ、
覺者にも尚ほ涙あり。
○ 十方の諸佛もみななほせ、
西方を欣求する心に偽りはあらじ、
南無阿彌陀佛、御名を遊して、
我は宇宙の大法に眠らむ。
(大正九、二、二七)

御聖人様と私

辨 康

○明治廿五年我九歳の時、其頃「行者様」と呼び

參らせし御聖人に初めて御目に掛りけるを、今迄かに偲びまつりて

わきまへぬ幼心の底にしも暮き種子は植えられてけり

○十七歳の折、三河岡崎にて不斗も拜せしかど時來ねどやがてはとこそ恵まるゝ高き心も知らぬ拙さ

○大正七年春静岡にて三度拜するを得て御光は遍く照しますもと眠れる我を呼び覺ましまる

○大正九年二月拙寺別時會の折拜し參らざる目を閉じて見奉れば常磐なる國の主の此處に來ませる

○大正九年十月十二日の明け方釋尊の御姿に見えさせ玉ふ御聖人を夢に見奉りて

限りなき壽の親のいましめを傳へんとぞ幾十幾たび

○同じ月の祖山別時會にて感じ參いらする御光の國は此處ぞと目の前のしづまを示す姿たふとし

○祖山より御跡を新瀉にしたひ行き、善導寺の門前に往本上人と共に御出迎ひしつゝ、車

上の御聖人を拜し參らせし時

うるはしき御顔も殊に麗しく拜がまるゝ我心うれしきを得る事の殊にうれしく

○今日より廿日餘り御隨從申し上げて高き御導を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

○柏崎にて御發病の御看護參らせし時、御足の裏の此處彼處に固き所の多かりければ、御若

き頃の御修行の御名残と深く忍ばれて

御佛の千ぶく輪もかやらん子等に代れる御跡尊とし

○御遷化を悲しくみつゝも尚ほ御教を偲びて

あたくさき情の御聲耳にあれば御教の親を我にのこれる

○靈籠に入りませる尊き御顔を拜し奉りて

常磐なる國にいまして我が爲に光りまします法の燈火

○茶毘の歸り路にてひたすらに戀しさましければ

聖き名を唱ふる度に偲ふなり救の主の御顔御こゝろ

○行末に思ひ入りて

いましめは子等の心に記されていよ、榮えん御光の跡

獨執の我を捨てよと教へける父の聖のいと戀しき

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

を御導

御名稱ふ其たびごとにおもふかな

わが法の師の深きみおしへ

來まきぬとおもふものから法の師の

みないふときははなほぞかなしき

○辨榮上人禮讚

當麻山光明學園 吉田庄七

仰き見れば光の中にます君を

遊けりとしはし思ひけるかな

とことばに盡きぬ光の中にして

法を説きつゝ師の君おはす

やるせなくかなしきものと歎きにし

死の間さへも今彼れけり

死を破りてとほに活きにし師の君の

光したへて吾れも活きなん

さやかにもきよく尊く照します

光の君を今しあふぎぬ

變りなき光と化りて笑みたまふ

師のみすがたを拜みまつる

み光明の教たれにし御姿を

聖き淨國にあふぐけふかな

きよき國はちすの上にかゝやける

生命にも取りかへませと祈りける甲斐なき今日の悲し

みに逢ふ

眼閉ぢしむじみ佛を念すれば涙の中に慰めの湧く

念佛の聲澄み行けば佛のありしなかにうづり來るか

も

ひぢりの姿あふぐ尊とさ

日のひかり月の光とらるるも

日も夜も照らすつきぬみめぐみ

世の闇に泣ける我が身をぞこしへに

導きたまへ聖きみくにへ

みほとけと一つに融けて念佛の

三昧の中に師のきみを見ん

み光明の念佛の功しつらぬば

この世ながらの淨土なるらん

大みおや慕ひこがるゝ一聲の

念佛も蓮の花と開かめ

みほとけもひじりの君も共にして

子らの念佛をみそなはしむ

生きのまゝ光明の生活おしへける

み足のあを吞もたらん

○辨榮上人を偲び奉りて

多田紫明

攝理かや如來の深き心かや師父召しましし御手の業は

いと深き御心ならめしかはあれど今日の別れの堪へら

れなく

○同一信仰

雖と共と呼び交ふ聲や霞む御

○故上人の感化

嶺 菴 房

○福岡縣筑前廿木町法泉寺總代石橋松太郎氏の家庭は

父祖以來の篤信者にして、殊に故聖人の感化を蒙りて

よりは、總本山の三昧會に參加せられ、愈熱心なる信

者の一ととなられ、念佛の體現を實行せんとて、一

昨年新築家屋の棟木には、現下御染筆の大名號を彫刻し

又聖人直筆の家憲を作製し、同家工場に於ける多數男

女織工に至るまで、講話會度毎に、光明禮拜儀を稱へ、

『消き御國』の聖歌を誦ふなど、大に光明主義の體現を

期せられたり、又氏夫人美喜子氏は左の道歌三四を寄

せられたり、蓋し聖人の温容慈顔に於ける、と雖も聖人

感化の御精神は、斯くして信者の頭腦に宿りつゝ、永久

に亡ぶること無かるべし。

故聖人を弔りて

法の花いつも盛りたのしみし

かゝいもあらしと成りにける哉

法の花いつも盛りたのしみし

かゝいもあらしと成りにける哉

法の花いつも盛りたのしみし

かゝいもあらしと成りにける哉

法の花いつも盛りたのしみし

かゝいもあらしと成りにける哉

法の花いつも盛りたのしみし



今よりは父のかたみどきしめて

南無阿彌陀佛と離れざらまし

○尙同氏夫人の修養は左記の素野なる道詠に現はれ來り同氏夫人の信仰状態を物語ると共に故聖人感化の一端を知るに足れり。

浮き事は浮きつしづみつ限りなき

限りある身をあなた任せに

うき事はまた此の上に積りかし

彌陀頼む身は心やすけれ

世の中はあてにならぬをあてにして

あてにならぬを歎く感き

火の車迎ひに來なばきてもよし

南無阿彌陀佛を手土産にせむ

おにもこい佛も來れ諸共に

○辨榮上人の身まかり給ひしを

悼み奉りて

中野吉太郎

かりの身はよしや消えても法の師の

ときしみのりはごはにかかやく

千代までごいのりし人は捨ておきて

哭山崎上人

福岡 中尾 默笑

迂老不幸而不得謁見聽問之機終生痛恨事句申故及

衆生渴仰生如來 遍照十方慈眼開

何事化緣薪未盡 無量壽國忽爾回

○柏崎だより

悲しみの涙は氷りて雪のちらつく中を、重き歩みをふみしめて、御上人の靈柩を送り奉る迄の永々の間彼地に於ける清土信女は勿論新潟長岡其他の諸見妹は何くれどなく、御盡しくされたるは會員一同の深く感謝する所であるが、それに因みて會計に關し詳細なる御報告を得ましたから、廣く各位の御了知を得て置かばやご存じ、關係諸氏の同意を得茲に掲載する事に致しました。

辨榮上人御病中及密葬費收支計算記

收入之部

一金千貳百八拾圓也 總收入高

内譯 見舞金收入

一金四百七拾壹圓五拾錢

うせしひじりのころよふかさよ

いまはたゞ佛にすがるほかぞなき

たのみしひじりもうせましましにけり

いまはとて山邊に入りし月かげは

やがてすむらむ西のみ國に

彼の土よりかへり來まして御名となふ

わがはかり來まをまもりまますらむ

そゝたきの煙のうちにほのみゆる

ひじりの御影なつかしきかな

新玉の年のはじめもつかねぬは

たへぬ思ひのあはれなりけり

○追憶のころを光明會の名によせて

光にもさまゝあれごみ佛の

ひかりにまさるみ光やある

明るみへみちびきませと戀ひしたふ

ころろはごはにかはらざるなり

會へばまたわかるゝ事としりながら

たれにあかさん南無阿彌陀佛

香典收入

一金八百拾六圓五拾錢

支出之部

九拾六圓廿五錢

九拾八圓四十五錢

九拾圓三十五錢

九拾九圓四十二錢

御密葬支出

一金八十圓四十六錢

一金十四圓四拾錢

一金七十圓零十錢

一金貳百十五圓

一金百貳十五圓四十一錢

一金百八十五圓八十錢

一金五十四圓六十錢

一金七十三圓五十錢

計九百四拾圓八拾壹錢

差引殘金五拾參圓七錢

内貳拾壹圓拾錢

右之通り候也

大正九年十二月十日

原氏預り

印刷増發其他の雜費

渡邊 孫吉

亦御因縁の尤も深く刻み込まれた、機樂寺の山内風量

佳良の山地を選び、報恩記念大墓碑を建設せんと計畫

されつゝあり、其發起者は、吉岡性空、籠島順故、原

吉郎、羽賀虎三郎、高橋孝順、佐藤徳三郎、金井助三

郎、渡邊八右衛門、渡邊庄輔、小池上春五郎、佐藤惣

吉、下田藤七、井口庄藏、其他續々申込まれる趣なり、

其費額も二三千圓の豫算なりと云ふ。

定めし立派に出来る事ならん、それにつけても、精神

的永遠の記念碑は、いとも高く、いとも堅く、建てら

れむことを望む。

○編輯瑣言——御密葬の際固らずも責任を荷へごの御

話で、乍不及御世話する事と致しましたが、何分別れ

ないから不都合の多いことを皆さんに御詫します。

丁度年末と年頭との一年中の最多忙時期に御寄稿を

依頼したので、定めて御迷惑の御方も多々ありしなら

ん、併し之も御上人の努力主義の一端なりと思召被下

度、編輯子も御同様に多忙で、時には汽車中で、非常

を買ふ時間も惜しく、パンを噛みながら、走つて食つて

讀んで、致しました事もある様な次第です。

寄稿者各位へは一々禮状は呈しません、御一同へ深

く感謝の誠意を表し奉ります。今後とも亦種々信仰談の

御寄稿を冀ふ次第であります。

大正十年一月廿五日印刷

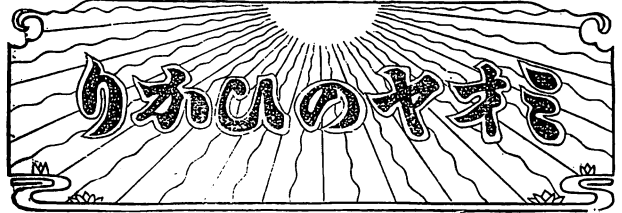
編輯兼 岩品誠信

印刷人 秋場熊太郎

發行所 光明會松戸教會所

千葉縣東葛飾郡松戸町二丁目

振替東京四九三〇八番



號四第卷貳第

光明主義

宇宙の一大ミオヤを信すること。  
 ミオヤの光明を得ず、光明の生活に入るべきこと。  
 一のミオヤを信する時は、一切の人類は同胞たるを信すること。  
 人類はミオヤの御子なることを自覚すること。  
 人には必ず脱却せねばならぬ罪惡の垢質あるを信すること。  
 光明を信する時垢質を脱却すること。  
 此言は天の一大ミオヤを信すること。御知らせ申したのであります。  
 私共は我々も我々も忘るゝ事能はざる。一の一大ミオヤをほんとうに  
 世の同胞衆に御知らせ申すのであります。親を離れて子供は成長する  
 ことはできぬ。私共の心霊はミオヤの慈悲の光明を離れて成長は  
 できません。世に一のミオヤを知らぬ爲に、ミオヤより賜りたる最  
 貴なる日々時間も勢力も私事に使つて居るの實に勿論  
 ない次第であります。私共はミオヤの光明を仰ぎ、例へば太陽の光を  
 蒙りて、宿米が成熟する如くであります。故に眞實に如來の光明  
 を獲得する時は漸々に人格が充實してきます。如何にして如來の光明  
 を獲得できるでせう。如來の光明を蒙りて人格を日々充たしめ  
 るに欲せば釋尊の教へに依るべし。釋尊は教へて曰く、其の光明の感神  
 功徳を聞いて日夜に稱説して至心不斷ならば意の所願の如くに光明  
 の中に生るゝことを得べし。(御遺稿中より)



辨榮上人御遺稿

禮拜

禮拜は人間から神に對する宗教である。  
 禮拜は靈的交流、崇敬、感謝、讚美、の中に心霊を發  
 露する。  
 禮拜は神と人との間に至誠の一致を計る。  
 禮拜は精神が本源に遡る心霊の最行爲である。  
 禮拜は全心をこめて至誠心から發する精神なり。  
 禮拜は人の心悟の最も奥深き秘密までも知見したまふ  
 神に捧ぐる至誠なり。是禮拜となる。

如來は常に我等を求めたまふ。至誠と深心と、欲望と  
 によりて。  
 禮拜は人生の全體に對する一大使命を齎らす。  
 禮拜は人生を爽快にし、蘇生せしむ。  
 禮拜によつて萬事面目を新にする。  
 禮拜せぬ人は實ることのできる果を得ることできぬ。  
 彼は新らしき光明を得て、悦ばしい生活を送るこ  
 と能はず。心霊の泉は涸れてしまふ。これを滿す高  
 尚な源が彼にない。  
 眞の禮拜は生命の水の源に導いて新鮮な歡喜を以て  
 神に光りを興へるのである。また同胞に類し得べき  
 生命と悦樂をもつてをる。  
 禮拜は靈的氣力を増進する。人格が神の人格と接觸す  
 る。發電氣に觸れて電線が電力を傳へるやうに、神  
 との接觸によつて心霊は心霊の力、智慧、法愛を接  
 けらるゝ。最高の奉仕に耐る力をもつて派遣されるので  
 ある。我等はミオヤに受けたる靈性の氣力を備へて  
 をる。この氣力を最も力強くせんには日々々に新たに

— ( 2 ) —

生るゝ禮拜の力。  
 禮拜は人を日々々に新にする力の源。  
 人はミオヤと交りて、天性を完ふせんが爲に生れた。  
 人の本性はミオヤと同じく兩者の間に牽引力があ  
 る。ミオヤは常に我等を照監したまふ。(無に我は  
 行道と、不行道とを知て度すべきに従つて度す)  
 我禮する時、我は人として潔きものとなる。禮する時  
 清淨光によつて清めらる。  
 禮拜はミオヤと親近することである。心の中に、子が  
 親と交る如く、心霊は禮拜の中にミオヤと交る。  
 子の喜びは父と俱に在ること。禮は天父と俱に居るを  
 感せしむ。孤獨寂寞の境遇にも神と俱に居ることを  
 知る。我獨り居るに非らずと感せしむるのである。  
 我はミオヤの慈悲の面に接すの想ひ程靈なる樂みは  
 ない。  
 人は常に頻りに交る人と背向する性をもつて居る。屢々  
 禮拜する時はミオヤと交る。ミオヤと生活する時間  
 が長ければ、ミオヤに背る。

律的に、修法を爲されば効果はない、そこで弘法大  
 師はまた、八十八ヶの靈場を開き、佛菩薩を本尊とし  
 て、専ら佛菩薩の信仰を以て自修し、人を教へて  
 信せしめた。其弘法大師の信仰の結晶は千餘年の今日  
 世の老若の信者から弘法大師の石像また木像を安置し  
 て、切りに敬禮す。其信者は何れと云はば、下層の階  
 級に、多數をしめて居れども、弘法大師の像を、佛の  
 如くに尊崇して居る。  
 夫と反對に、達磨大師に至つては、弘法大師の如く  
 に、尊像等を以て神を代表したる像等に敬禮すること  
 を發さず。自己は本來佛、何ぞ他佛を禮せんと、自ら  
 諸佛を本尊として敬禮せざるのみならず、他人の佛菩  
 薩に禮拜するをも叱呵す、「汝自佛を敬禮せずして何  
 事ぞ他佛を拜す狂漢」と、兎の如き宗風の祖たる達磨  
 大師の畫及像は崇拜の對象物と爲さず、實に是因果の  
 理と云はんか、また聲に應ずる響と云はん、達磨大  
 師の畫及像は、崇敬の崇拜の對象とはならざれども、  
 達磨大師は非常に、以心傳心を宣傳した世に廣く法

反對なる好一對の兩偉人

禮拜する時はミオヤの聖本願に近づく。  
 禮拜は(神の)人生に與ふ奉仕の一部、又人間の義務  
 神の祝福、眞の義務は人の爲に爽快なる感謝と、温  
 かい愛と、強固なる信、光輝ある希望と見識と  
 を齎す。  
 達磨大師は神那教の元祖にて、弘法大師は、密宗の  
 始祖である。此兩祖の、靈的人格としての價値は、何  
 れを甲とし、何れを乙とは判じ難し、然れども、兩祖  
 の性格と云ふよりは寧ろ、宗教的性質の形氣が反對に  
 現はれてをる。  
 弘法大師は、其性質としては、文に筆に、多方面に  
 頭腦と靈敏とを持って、風雅も、神韻も、趣味も持つて  
 居るし、性格の趣に非ざるなきやと思はるゝに拘は  
 らず、密教なる宗教的形氣と云物は、最も眞面目で信  
 仰的である。勿論密法は、眞面目なる信仰を以て、如

縁を結ばんとする意志強く、世界的に傳法せんとする志望  
 よりして、天竺より起て、萬里の波濤を踏破りて、遠  
 く支那に來れるは、廣く世に法縁を信はんが爲なり。  
 神聖の崇拜の風は自から、探らざりしも、廣く世に縁を  
 結ばんとする最も深き意志は、尙千餘年の今日に至るも  
 亡びず、達磨の像と云はば、小兒の玩具にも、經師屋  
 の看板にも、また煙火入の根つけにも、兩々の方面に  
 用ひられてをる、是大師が世に廣く縁を結ばんとす  
 る意志に報ゆる處の自然の因果の然らしむる所ならんか  
 弘法大師は能く佛を、禮拜したる結果、また自分の  
 形像も廣く世の衆多の爲に敬禮せられ、大師は、自か  
 ら佛菩薩を敬禮せざりし故に、何人も其遺像に對して  
 敬禮せられず、然れども廣く玩弄せられてをる、奇な  
 る哉。

— ( 4 ) —

— ( 3 ) —

# 念佛三昧七覺支

擇法覺支  
 彌陀の身色紫金にて  
 端正無比のみすがたを  
 すべての雑念亂想を  
 神を遣して念すれば  
 精進覺支  
 聲々御衣を仰へては  
 心々彌陀を念じては  
 金剛石も摩さば  
 三昧に神を疑しなば  
 專覺支  
 偈に佛を見まほしく  
 身命惜まず念すれば  
 念々佛を念すれば  
 靈きめぐみに融け合て  
 輕安覺支  
 圓光徹照したまへる  
 聖名を通して念ばへよ  
 排きて一向みほとけに  
 便はち三昧成すべし  
 慈悲の光を仰ぐべし  
 勇猛に勵み勉めかし  
 日光に映する如く  
 彌陀の光は輝かん  
 愛慕の情いと深く  
 即ち彌陀は現はるれ  
 慈悲の光にもよほされ  
 歡喜極く覺はゆれ  
 御名に心はさそはれて  
 三昧純熟する時は  
 我等が業障深き身も  
 身心あるを覺はえず  
 定覺支  
 彌陀に神を遣せみの  
 三昧正受に入りぬれば  
 慈悲の顔を見まつれば  
 入我々入の靈感に  
 捨覺支  
 絕對無限の光明を  
 此處に居ながら死がらに  
 夜なく佛と共に寝ね  
 立居取除派まして  
 念覺支  
 靈龍に染し我ころろ  
 聖旨の光に變化せば  
 聖意を感ずる時は  
 みな佛心と應はしく  
 心念ます、至微に入り  
 清明にして不思議なり  
 慈悲のみむねに融合て  
 定中安きを感ずなれ  
 もぬけ果たる野清く  
 神氣融液不思議なり  
 すべての障のぞこりぬ  
 聖き心によみがへる  
 中に安位する時は  
 神は淨土に栖あそぶ  
 朝なくも供に起き  
 須臾も離ることぞなき  
 秋の梢のたぐひかも  
 光榮あらはす身とはなる  
 八億四千の念々も  
 佛子の徳はそなはるれ

# 有相夫人

出家と云はば、只剃髮して衣を着たる者を、出家の如くに思ふ。けれども、夫は假名の出家とて、名ばかりの出家である。眞の出家とは、釋尊が太子の御り、北門の花園に遊びし時、御り森林靜かなる處に、座したまふに、いかにも寂靜に、威儀整然たる沙門の姿にて、太子の前に立るを見玉ひ、仁者は如何なる御方に在します哉と、問ければ、我は沙門なりと答ふ。沙門とは何なる身にておはすや、……中絶

人生は過ぎ易くして、日々世務の忙はしき業に、心も散り亂れ、見るに、聞くに、茫々として、塵に惹かれて、自己本性の奥に、ミオヤより受けたる、靈性を開くこともできず、ミオヤの光明に觸れることを得ずして、一生過ぎ逝きなば、聞きより聞きに迷ひ、未來また冥々たる開路に入るの外なし、實に是人性の根事である、青年士女は、何とぞかして幾日夜の時間を換合して、ミオヤより與へられたる、靈性の開發の爲に、

念佛三昧を勤修して、ミオヤの光明を我有として、光明の生活に入られまほしきものである。

雜寶藏經に、昔し盧留城に優陀夷王といふは、聰明英邁なる大王であつた。其夫人を有相と名け、端正にして、雙びなきのみならず、賢明にして婦徳具備したまへり、されば王も甚だ愛敬したまへり。彼の國の法として、王たる者は自ら琴を彈するを許さぬ、然るに夫人は、曲室に在て、王と共に、歡戯するに、自ら王の寵を恃みて、王に曰し上ぐるに、大王よ君琴を彈じ玉へ、妾自ら起て、舞を爲さんと、初めて手を舉る時に王は素と相學に善ければ、夫人の死相が已に現はるるを觀玉ひて、憐然として、歎息を洩らし玉ひければ、夫人の白し上ぐるは、大王よ、妾は王の恩寵を蒙りて敢て曲室に於て、王の彈琴を願ふて自ら起て舞を爲して、娛樂せんと欲するの、何か御意に召さぬ事有つてか、琴を捨て歎息したまふにや、妾甚だ氣に懸り候へば、願はくば妾が爲に聖道を洩し玉へと旨

し上ぐれど、王は道かに答ふことに躊躇せざるをえぬされど、應懇に請ふて已まざりければ、王は實を以て答へ玉ふ。夫人はこれを開きて甚だ憂懼に耐えず即ち王に白して言さく、妾曾て石室の比丘尼に開けり、若し信心にして、出家すること一日すれば、必ず天に生ずることぞ有と。妾出家せんと欲す、願はくは大王よ聽許し玉へ、王愛深くして、夫に曰て曰く、六日の間に至らば當に汝に出家を聽るすべしと。

遂に六日は過ぎけり、夫人に詣り玉ふ、汝善心ありて、出家を求む、若し天に生じなば、必ず來て我に見へよ、されば我聽し去らんと、是誓をなして、夫人は許せられて即ち、出家を得、八戒を受け、其日に石室を飲みけり、己に命の旦暮に逼りければ、餘想除念はなく心はもはや此婆の快樂も求めず、専ら清淨、眞天に澄ましむ、一日出家の心は實に僅かなれども、夫人が一日の小時間に、全く人間の表に出て、神を虚空無爲清淨の地に住入す、而して平生とは殊にして、無後心とて、後顧のない精神なれば其心力

— ( 6 ) —

— ( 5 ) —

得する時は、未だ光明を得ざる時に比すれば、闇夜と日中の懸隔あり、或會員の婦人の曰く、妾未だ入信せざる前には、良人は教育も自分よりは勝れ高尙な理論も有つてあり随分偉い人と謂ておりに自ら信仰の光明を得たる今日にして、夫の理想と希望とを觀察するときは、男として何故進んで高尙なる理想と、遠大なる希望とを有たうとせぬのか、瑣々たる名譽や何かに捕はれてをを見る時はハガユクと思ふ、妾如きの婦女子が、斯く思想上に高遠なる光明を信仰するよう爲りしは全く、ミオヤの恩寵を深く感謝せざるをえぬと。

は、甚だ強い、夫人は服中統結して、つひに命終しける。

夫人は出家の善緣に乗じて、天上に生ずることを得て、本誓を憶ふが故に、王の所に至りぬ、光明熾然として王宮を照しぬ、時に玉問ふて曰く、汝是誰ぞ、天答へて言く、我是王の婦にして有相夫人なり、王喜びて曰く、さらば願はくば朕に就てよ、天答へて言す我今王を離るに身願にして、近づくことできぬ、但先の誓に報ゆる爲に、來て王に見ゆるのみ、王は開し召されて心開け、意解けて、自ら歎じて言はく、今彼の天は本我婦でありし出家すること一日便ち天に生ずることを得、その神志の高遠にして還て自から歸せらる、我自慚つ何ぞ出家して、神氣高遠に清淨無爲の靈性を開發せざらん哉と、我曾て聞く、天の一爪甲さ一閑浮の地に値すと、我此一國何ぞ食はるに足らんと、位を捨てて子に譲り出家得度して道を得たりと。

道に入りし後と未だ道に入らざる時の、精神狀態は甚だ懸隔す、一度念佛三昧の道に入て、光明發

— ( 8 ) —

— ( 7 ) —

# 宗教の必要を感ぜぬ人に示す

中等教育を受け位置も相當なる或壯年の男自ら謂へり、曰く吾人は宗教の必要を認めず、宗教は愚夫愚婦をして惡を作爲せしめぬ方便に過ぎずと。予語つて

曰く、今聞く處によれば君は宗教の必要を認めずと言は明かに君は未だ宗教は人生に何なる性能を興ふべきものなるや、また人の精神には如何に宗教の必要なるやを未だ明にせず、故に斯の如くに自ら決定して得意とせるなり。是實は君未だ自己の本性を自覺せず、また人生を自覺せざる位なり。若し正しく宗教の必要なしと言はば君は人間にあらず、人類以下の動物に過ぎず。恐らく君は未だ宗教の必要を感ずべき權を得ぬに然か言つて居るのである。故に君にして若し能く人生の意義を自覺せば必ず宗教の必要を認め、度脱の要を感ずるに至らん。宗教と言ひ、教育と言ひ人類以下の動物には其受けたる心の資性劣拙にして未だ教育及宗教を受けべき可能性を其の腦中に豫備して居らぬ故に教育または宗教の必要なき生物である。彼等は本能的に馬は馬、牛は牛自ら受けたる天資の本能を全しておれば天分を盡すのである。人類は動物の如くに本能のまゝに一任することの出來ぬ最も狡猾なる動物である。故に靈性を開きて動物性を高等なる理想の

— ( 8 ) —

— ( 7 ) —

境に誘導するにあらざれば、牛や馬よりも智慧が進んで居るだけに悪きことをする。

動物は理想なる智慧を有せぬ故に只目前の刺激に反應するだけの識別である故、時間的にも將來先から先の取越苦勞もなかつた空間的にも他人と我との關係を種々の方面から観ることもまた慮ることもない。人類は智慧が進んでおる位に處世にも他の動物よりも苦が多い。智慧が發達しておる爲に先から先の慮りがある故に苦が多く悶を重ぬる。また道徳上にも智慧が進んでおる爲に悪いことをする。他の動物のやうに本能に任じて居られぬ。意識的に悪いことをする。然れども人類は悪いことをなし得ることに意識が發達してあると同時に善き事も出来る。故に人間は只人類との關係のみに止まらず天の使命を重んずべき宗教心がなくてはならぬ生物である。宗教に依つて研かざれば天より受けたる責任を完成することはできぬ。今君が爲に人類と他の動物の精神に受けたる責任の異なる處、人類は宗教に依つて研ぐべく本能性を具有する所

## 涙々たゝ涙

宗教大學 中野善英

私は御上人には唯だ一度お逢ひすることを得た人間です、それも夏の晩講席へ待て居睡りと疎痺れて、夢我夢中の裡に退出した至る縁の薄い人間です、それでもお聲の涼しいそして軀の太つたお顔のツツ／＼と音切つた、いつも墓場の上に安坐かいて居られるやうな寂かな落付いた、方であつた事、文はは今も判然り覚えておきます。私はお忘れになつた聖朝銀座の電車の中でお聞きしたが、その時唯一度記憶を明かにしただけであつた。又忘れ果てた程の人間です、そして其時迄御上人に對して二つの誤反心を懷いてゐた——その逆反者としての威泣憤恨、終に三度目に初めて御上人に御遇ひすることを得ました。涙涙、冷水三斗、たゞ涙の外はありませぬ。私は此涙を何處に捧げませう?

涙涙その涙の裡に上人はキラ／＼浮んで居られました、然も笑つて想して、そして咽喉を通つて腹の中へ滲り私を今でも温めてゐて下さる、力となつて私を離れてゐて下さる、私は救はれた私は子として容られて

以を明さん。例へば動物に庭の塵石の類あり。また珠寶石の類あり。而して塵石は力を盡して研磨すべき要なし。何となればいかに琢磨すとも光彩を發すべき性質なし。寶石珠玉の如きは能く充分に琢磨する時は本性を發揮して燦然として光を放つに至る。動物の性質は寶石に比すべき本能のまゝにて足れり。人類の精神は寶石の如くに琢磨せざれば光彩を發せず。従つて例へば寶石を能く磨く時は太陽の光が反映する如く、人の精神が靈性開發する時は如來の心光能く反映す。彼の牛馬の如きは塵石の如くに何に他より宗教の養を施すも之を受くる可能性なし。況や宗教の本尊如來の心光を反映すべき性能あらんや。

縦今人類なりとも若し宗教的の琢磨するにあらざれば心靈八面玲瓏として彌陀の靈光反映する能はず

○恩師上人に手向け奉る 金山すま子

肉の目に見えまつらねどもなほす  
み胸のなかに勇みすゝまむ  
師の君のみのりの旨をかしくこめて  
つくるよもなかりに傳へむ  
もろとも同じみのりを知るべにて  
慈父のみもこにかへりゆかなん

なます。私には上人の死と云ふことは少しも信せられぬ、赦された兒としての私には益々上人は生々として軀を擧げて逼つて來られる、私は其腕の中に宿を與へられました。四日の御往生が所謂化身の上人の入滅であるとした處で、それは私には少しも悲しくな益々有難い。それが眞の「往生」であつたことを疑はぬからである。私は往生の席に列つた上人の御往生端相を訊ねてゐる人を見た、端相で以て上人を買はふとする其買渡者を慫慂に私は怨めしく憶つたこととせう。上人が最々、最後の一念まで自らミオヤとして度生の一念化他道説に徹せられた——又大ミオヤに「我を度し給へ」と念佛隨順せられた。又大ミオヤに「我を度し給へ」と念佛隨順せられた。御往生を憶ふときを度して其御往生が成佛が疑へず、光りとなつて力となつて報身として法身として私達の頭の上に掌の中にあり／＼と在ります。あ、此尊い私共の身の周りを護つてゐて下さる上人に對して何で涙せず居られやう。

今となつて初めて眞實にお逢ひしたいと願はしくなつて來た私には、色身の御滅度によつてより自由により容易になつたことを思ひ、悲しくかつ尊く拜まれます。呼吸時に聲に應じて答へて下さる現はれます。そし

て此罪の子をも抱き探して下さる一切の人にも應じて下さる。滅度によつてより大きく復活せられた、私は他の人と俱に此滅度を讃仰する。敵も味方も等しく攝理の裏に伏拜する。あ、尊い佛陀の滅燈。悲しむ前に權はねばならぬ。各々部屋に心に御上人を一人宛お迎へしたお禮を申さねばならぬ、お慰めせねばならぬ、破聲の遺弟で有つてはならぬ惡業の法孫であつてはならぬ。大きく上人を生かさねばならぬ、御上人は一度の獻華や慕參よりもより私共の生活の充實を欲して居らる、道場に迫撃する時も世務に汗する時も等しく笑顔をを見せて下さる。そして「馳め」「行け」と聲援して居る上人の連續がある——それが念上人だ報恩だ、遺法を奉るのだ上人と俱なるのだ——とより私には憶へぬ。あ、此涙、涙は上人の御軀より漏れる汗である玉である私は此涙の味を一切處一切時に決して忘るまい

最後の御説法は斯くして私には最初の説法であつたそれは十一月の「ミオヤのひかり」に

經に菩薩は常の師はない、若し己が缺點を指摘し非難を加へ己が知所を能く見出して勝る人こそは我を矯正し玉ふ恩師とせよとの御垂訓辱けなく感ぜらる

其涙で濡く消したいと思つてゐます。  
(二〇一一—二二〇〇)

## お上人を拜せし私

三木雄譽

明治卅八年日露戰の當時で私が日曜學校を起し、上人と原青民上人の合著「佛教要問答を教科書として居ました、其時上人は大寶寺へお越になり始めて御法話を伺いました。兒童の宗教的教化を大變にお喜び下さつて、熱心に動物成長の状態などの例により言葉が充分に開取に下さつた。化他としては墨繪の文殊、觀音様や米粒名號でお結縁遊された。而し常念不斷のお念佛であつた。次は四五年前大阪教區講習會の時に私専へお請待申した。侍者は鮮人が侍て居ました、それで鮮人が三十分程お上人の人格を通して如來様を観ると云ふて日語で話しなされた。上人は其間に米粒名號を頻にお昔になり信者に與へそれから御法話を頂きました。何時もながら力強い信仰談でした。次は大正九年三月祖山お別時の折り泉上人と私は伺つた。在來と

とある。識り給ひてか識り給はずにてか、滅後に迷はん吾兒等を此光りを以て導き給ひぬ、確かりと私共の心の中へ打ち込んで下さつた、師として惡魔を認容せらるゝ上に一切に拜すること出來たのだ。滅後にあつた。佛身を何處にも拜すること聞くことは出來なかつた。此歡喜の心に勇躍の歩の上に常に生き生きてゐて下さる否々々、上人を罵罵する人の上にも、逆反の輩私共の爲めにも喜んで逢つて下さる。私共が上人に對してさもい心を起す時私共が怒らされて嫌食に燃え狂り狂つてゐる時、怒るな幸よと教つて下さる温情を傾けてゐて下さる。此大慈悲を何と言つて云ひ願はさう。——唯涙、涙である。

上人を憶ふとき賢尊に接し彌陀に聞し宇宙の統制に合する。花に見る鳥に聞く露土に即してお逢ひが出来る。いつも廣い翼で覆つてゐて下さる、風も雷も皆其下に隠されてゐる。たゞ私共には念佛と精進行のみが殘されてゐる。報謝と讃歎の力を吹き込んでウント行じやう。そして熱い澄んだ涙で——涙で一切を清めて逝かう、要の甘露を汲んで傾けて太つて行かう。……たゞ此れだけ私に遺されてゐます、此詞も

て上人不斷の傳道を新聞などに見て法味に浴せんと思つた時間がないから參ることも出来ませんでした、其時に上人は小冊子皮體が今到着したと二人に手づから下さつた、九州の信者からとて鉛筆を貰ふたからと法話しつゝ、蓋と上包紙を二つに製菓茶と共になつた。其動作總てが生みの親に値ふ以上に難有く感じました。其時上人が大阪にも光明會をこ仰せられた。何卒宜敷とて次の間に下りました。次は同年十月祖山別時のこと、今度は如來様の御旨を頂かず再び寺へ歸らずと衷心覺悟して參りました。五日間に於ける一日／＼の未經験の事柄はたしか私の永遠に於ける強い力／＼を與へられましたことを、御親に謝すると同時に上人御指導の賜を感謝いたします。其際豊田省三氏安田老女夫と三人で拜しましたら、上人は休時間でも雲中の如來様に向つて繪筆を運んで居らせられた、温容玉の如く私は斯様な喜びが今日が始であると感じました、すると上人は最も力強く如來様の大人格に靈化せられよ、と懇にお垂示を下さされた。それで大阪入士へ土産として光明會を組織することゝし上人を詣り奉りて十二月六日を期し多くの同胞と其日を待ちに待て居ました處が今

度俄かに西化を急がせ玉ひたり。然し私は一度上人のお承諾を得て居ます何時かはお上人に値ひ奉ることがあると信じます。上人の法身は常に在して滅し玉はざればなり。

自 識

如來様は一步くお手許に寄る程難有い。人間様は遙に交れば始終に難有い。

○筑紫より

仲原清光寺に詣てお別を惜み奉りて  
村島つね子上

たび衣がさねくゝて法の道

いやすみ行く袖ぞおしけれ  
辨 茶

○常子の君へよみかへし  
こゝかしこかたははしばし別れても  
こゝろは同じみひかりのなか

○三尊様を拜しまつりて  
ひとり首いふて枕につきにけり

○同夜に三尊様を拜し奉りて  
さんぞんぶつをあふく夜よりは  
ゆめさめて心うれしき小夜中に

あります、偏執を以て言へば此の因縁的世界依歸の心を脱却して絶対的心靈界の中に歸依安住しつる心境であります。

能産者たる宇宙の大靈には法爾として所産者たる衆生の心靈を招ねかんとする誓ひがあります。換言せば父が子を呼ばんとする古き約束があります。「來れ、我々を呼ばんもの必らず我之れを攝さめん」とする法藏菩薩の立誓本願は此の約束の具體化ではありますまいか、宗教上に所謂父子相迎とか大我小我の融合など云へる義語はこの誓ひと大なる心と攝さめられんとする小なる衆生の心が投合致一したる心境に附した名目に外ならぬのであります。そしてあらゆる宗教の秘義は皆此の大なる心即ち、如來、神の誓ひの中に、此の誓ひの中には自己の生命を犠牲けても悔みざらんとする如き絶対的信賴依歸の赤き心より成立して居るのであります。

凡そ世の中に因縁約束と云ふことほど奇しく不可思議なることはありますまい、時に或は一重の壁に思ふ人

またも二尊のあり／＼として  
○述 思  
人はいはいは彌陀にあかさん  
(孫栗信者 六十九老妾)

### その固き不死の誓ひの中に

奥村 辨 誠

何んぞ云ふ幸福な身の上でありませう、末弟は常にその固き不死の誓ひの中に抱擁されつゝ歡喜の裡に日々を生きて居ます。まだ未信の時は分にはどうかしその誓ひの圈内に投入り度いと斗りに苛立つて居ました、けれども今日では恰も網に覆はれた小魚の様にその固き誓ひの網の中に捕擄となつて居る様な氣分であります。捕擄と云つても身心を束縛する様な世上の究屈な規定ではありません。洋々たる海上に投げ出されて波のまに／＼自適悠々たるが如き油然たる心境で

を終古に隔てるといふこともソコに之を隔てるべき他の約束があつたので、又丸い池に思はぬ人をハタと行き合せるといふことも矢張りそこに合ふべきもの約束があつたからであります。天下一物として未だ因縁約束から成立してゐないものは皆ないのであります。只だ靈の眼目したる凡夫にはこの裡に隠れたる細き約束因縁の糸、誓ひの糸を看取るに由なく一概に之を運命とのみ放擲し去つて居ますか仔細に之を問ひ究ねれば花の開落も月の盈虚も皆各々ソノ約束の中に上下旋轉として開の夜をさへ纏うて居るのであります。

衆生が蠢々として六道の巻に晒れ得ざるのも皆てコノ六道の巻に晒るべからざる悲しき約束があつたからであります。或は名に戀に、家に金に迷ふと云ふのも矢張りこれらのものに晒るべからざる約束の糸を纏り出しておからであります。そして凡夫はこの生任異滅に間なき自然界の中に不動安住の地を約束せんとするが故に一を得ば二を失ひ三から四へと轉々して遂に

ソノ安定地を得ざること恰も廻轉く地球の上に生思んで廻轉かじとする様なものであります。そしてかかるが故にこゝに纏てしなき無明長夜の悲劇が纏々として演出されて行くのであります。これ皆ソノ根本に觸れずして枝末なる影を追ひ行くからであります。こゝに三世の諸佛出世し給ひて衆生が固く結ばれたるこの自然の約束因縁を脱却せしめて清淨本然なる心靈界の中に安住の地を究めしめんといふのであります。此の衆生が世界依歸の心を脱却して絶対心靈界の中に依歸安住せしめんとする、これ即ち諸佛出世の本懐にして又一切宗教の根本義であります。

天に口なし人をして之を言はしむ、照身佛出世の意、こゝに在りて存す、そして天下の衆生は皆て三千年の古より此の御言葉、我祖釋迦牟尼世尊の金口より拜聴し來つたことあります。が末世濁縁の吾々は最早や鳴かぬ鳥の齒痒さを禁じ得なかつたのであります。然るに末弟は前世如何なる善根約束のあつたことでありましかこの大實在の裡に徹語證入し給へる、故

恩師上人の玉口を通して再びソノ絶へて久しき久遠の約束を耳新らしく拜聴することの出来ましたのは、未弟は幾度も幾度もこゝに蕪香合掌して、大ミオヤの攝護恩寵に感謝し併せて吾が宿善に踴躍するものであります。そして今は早や天なる、大ミオヤの御許に還歸り給へる、故上人の御約束は再び之れを究むるに山なきもその遺し給へる誓ひの御言葉は千古萬古に輝き行くことでありましかう、末弟は今その生き／＼した、固き不死なる御誓ひの中に一切を委ねつゝ、終局の善美に向つて向上の一路を辿らんとするのであります。馳るべき途程を誰さんとするのであります。

誰の花環は飾られたり、命婚の式終らば花郎たる吾人は一切と共に、アナタに會はむ。

大正十、二、五

大正十年二月廿五日印刷  
編輯兼 岩 品 誠 信  
發行所 秋 塚 熊 太 郎  
東京市東區本八丁堀一丁目十五番地  
千葉縣松戸市松戸二丁目  
光明會松戸教會所  
電話三三四八番